ISSN 0386-2577

研　究　紀　要　3

――考古学から見た房総文化――

3　弥　生　時　代

昭和53年3月

千葉県文化財センター

序　　文

円高不況と言われる昨今においても、首都圏に位置する本県の開発は急であり、埋蔵文化財の保護は緊急かつ重要な課題であります。

財団法人千葉県文化財センターは、こうした状況に対応し、県内における埋蔵文化財の調査・研究及び県民の文化財保護思想の涵養と普及を図るとともに、地域文化の充実に寄与することを目的として昭和49年11月に設立されたのでありますが、発足以来3年余、その活躍は全国から注目されているところであります。

このたび、従来の考古資料に最新の知見を加え、本県における弥生文化を総合的な視点からとらえた研究紀要の第3冊「考古学から見た房総文化　3弥生時代」が刊行されますことは、まことによろこばしいことであります。財団法人千葉県文化財センターの特色の一つに、発掘調査を担当する調査部と並んで研究部が設置されていることがあげられますが、研究部の目的は埋蔵文化財の調査研究の企画、遺跡の調査方法及び出土遺物の保存処理、情報資料の収集・整理・文化財保護思想の普及などであります。本書はこの研究部事業の一端を披瀝したものでありますが、学術資料として、高く評価し得るものと確信しております。

終りに、本紀要の刊行を慶祝するとともに忙しい現場調査のかたわら、研究に専念された調査研究員及び関係者各位に厚く御礼申し上げます。

昭和53年3月

千葉県教育委員会

教育長　今　井　　正

目　　次

房総における弥生文化の摂取とその波及について

斎　木　　勝
深　沢　克　友

第Ⅰ章　はじめに……1

第Ⅱ章　研 究 史……2
〔文献〕

第Ⅲ章　弥生文化の概要と変遷……15
第1節　弥生中期文化……15
遺跡分布状態……15
文化様相……15
主要遺跡とその出土遺物……22
第2節　弥生後期文化……54
遺跡分布状態……54
文化様相……68
主要遺跡とその出土遺物……74

第Ⅳ章　東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器……115
第1節　遺跡立地……115
第2節　集落構成……118
第3節　土器の組成……124
第4節　ま と め……135

第Ⅴ章　房総地方弥生後期文化の一様相
—印旛・手賀沼系式土器文化の発生と展開について— …… 139
第1節　研究史からみた印旛・手賀沼系式土器文化の特殊性と編年的位置づけ…… 139
第2節　印旛・手賀沼系期の提示…… 140
節3節　印旛・手賀沼系期の土器様相…… 141
第4節　発生と展開に関する一試論…… 151
あ　と　が　き…… 157

挿　図　目　次

第１図　房総弥生中期遺跡分布図（1/800,000）……16
第２図　房総弥生時代の文化様相（縮尺不統一）……20，21
第３図　須和田遺跡（１～３）・法蓮寺山遺跡（４）出土土器（1/4・1/6）……23
第４図　天神前遺跡出土土器（１），（1/4）……25
第５図　天神前遺跡出土土器（２），（1/4）……26
第６図　天神前遺跡出土土器（３），（1/4）……27
第７図　天神前遺跡出土土器（４），（1/4）……28
第８図　天神前遺跡出土土器（５），（1/4）……30
第９図　天神前遺跡出土土器（６），（1/4）……31
第10図　新田山遺跡（１・２），市原市惣社出土弥生式土器（３），（1/4）……33
第11図　星久喜遺跡出土土器（１），（1/4）……35
第12図　星久喜遺跡出土土器（２），（1/4）……36
第13図　中野台遺跡出土土器（1/6）……37
第14図　大森第２遺跡出土土器（１），（1/4）……39
第15図　大森第２遺跡出土土器（２），（1/4）……40
第16図　平蔵台遺跡（１），若宮（２～５）出土土器（不同）……41
第17図　菊間遺跡出土の壺形土器（１），（1/4）……44
第18図　菊間遺跡出土の壺形土器（２），（1/4）……45
第19図　菊間遺跡出土の深鉢形土器（１），（1/4）……47
第20図　菊間遺跡出土の深鉢形土器（２），（1/4）……48
第21図　船子遺跡出土土器（1/4）……51
第22図　船子遺跡（３），君津市八重原（４）出土土器（1/4）……52
第23図　房総弥生後期遺跡分布図（1/800,000）……55
第24図　久ケ原期遺跡分布図（1/800,000）……61
第25図　弥生町期遺跡分布図（1/800,000）……62
第26図　前野町期遺跡分布図（1/800,000）……64
第27図　房総弥生後期印旛・手賀沼系期遺跡分布図（1/800,000）……66
第28図　房総弥生後期埋葬遺跡分布図（1/800,000）……67
第29図　市川市域内遺跡出土土器（１），（1/6）……75
第30図　市川市域内遺跡出土土器（２），（1/6）……78
第31図　三ツ堀遺跡出土土器（1/6）……80
第32図　石神第Ⅰ地点遺構配置図（1/100）……83
第33図　石神・渡戸遺跡出土土器（１），（1/4）……84
第34図　石神・渡戸遺跡出土土器（２），（1/4）……86

第35図　江原台遺跡出土土器（1/4）…… 89
第36図　江原台第1遺跡出土土器（1/4）…… 91
第37図　生谷境堀遺跡弥生時代遺構配置図（1/100）…… 92
第38図　飯重新畑・生谷境堀遺跡出土土器（1/4）…… 93
第39図　阿玉台北遺跡遺構配置図（1/1,600）…… 95
第40図　阿玉台北遺跡B－010・011号土壙墓（1/20）…… 96
第41図　阿玉台北遺跡A－056号土壙墓（1/30）…… 96
第42図　阿玉台北遺跡出土土器（1），（1/4）…… 97
第43図　阿玉台北遺跡出土土器（2），（1/4）…… 99
第44図　阿玉台北遺跡出土土器（3），（1/4）……100
第45図　阿玉台北遺跡出土土器（4），（1/4）……101
第46図　阿玉台北遺跡出土土器（5），（1/4）……102
第47図　佐野原遺跡出土土器（1/4）……104
第48図　大厩・菊間・南向原遺跡出土甕形土器分類（1/8）……106
第49図　請西遺跡出土土器（1/4）……109
第50図　田子台遺跡出土土器（1/4）……112
第51図　参考資料の土器（1/4）……114
第52図　南関東の弥生中期遺跡分布図（1/1,000,000）……116
第53図　東京湾の潮流（上げ潮流最強時）……117
第54図　菊間遺跡の遺構関連図（1/800）……119
第55図　大厩遺跡の弥生時代遺構関連図（1/1,000）……120
第56図　城の腰遺跡の弥生時代遺構関連図（1/800）……122
第57図　菊間遺跡住居変遷（1/180）……123
第58図　宮ノ台式土器の文様模式図（1/4）……130
第59図　菊間遺跡土器組成（1/12）……131
第60図　大厩遺跡土器組成（1/12）……133
第61図　宮ノ台式土器の文様構成（1/3）……134
第62図　印旛・手賀沼系式土器形態分類（1/12）……142
第63図　印旛・手賀沼系式土器文様（1），（1/2）……143
第64図　印旛・手賀沼系式土器文様（2），（1/2）……144
第65図　印旛・手賀沼周辺遺跡住居形態（1/240）……145
第66図　土壙墓出土土器（1/6）……146
第67図　井頭遺跡出土土器（1/4）……148
第68図　朝光寺原式土器文様（1/2）……152
第69図　房総地方後期弥生式土器の波及経路……153

表　目　次

第１表　弥生中期遺跡表…… 17
第２表　弥生後期遺跡表…… 56
第３表　甕形土器一覧表……107
第４表　南関東地方弥生中期土器研究史年表……129

凡　　例

○挿図は報告書から転載しているが、加筆修正したものもある。

○土器の縮尺は¼を原則としているが、縮尺不同もある。

○掲載した土器実測図は、統一を計る意味で、断面には墨入れを施した。

○本文中の敬称は省かせていただいた。

第Ⅰ章　はじめに

千葉県文化財センターの研究部の活動も3年目を迎え、過去の紀要刊行という単独業務のほかに、本年は業務内容も拡充され、人員の増加をみている。

紀要刊行関係では、前々年の先土器時代、前年の縄文時代にひき続き、本年は弥生時代を研究対象としている。

折しも今年は、弥生時代に関しての特別展が県内3ケ所の博物館、郷土館で開催された。ひとつは、8月14日から10月9日まで千葉市郷土館において『'77特別展　千葉市内で発掘された埋蔵文化財展』が催された。弥生時代では、星久喜遺跡、大森第2遺跡出土の弥生時代中期後半該当の土器が展示された。次に10月18日から11月27日まで、県立安房博物館において『邪馬台国と古代房総』が催された。同展は黒潮を介しての西日本の文化と、房総の文化の交流を示したもので、弥生時代では総論的な一般展示に加えて、県内各地より出土の弥生式土器の展示公開も行なわれていた。特に1953年6月、対馬郁夫氏が明鐘崎洞窟を調査した際、出土しのち国指定の重要文化財になった壺形土器の展示は、大変貴重なものであった。

日時的には、安房博物館の特別展とほぼ重なってしまったが、10月22日より11月27日まで、市立市川博物館で『開館5周年記念特別展　弥生　その土器の美しさ』が催された。須和田式土器から前野町式土器に至る土器の系譜、宮ノ台式土器のセット、久ケ原式土器のセット、弥生町式土器のセット、弥生式土器の終焉と土師器の出現など、弥生式土器のみをとりあげた展示で、近年、県内で発掘調査されたものの成果が十分示されていた。

その他、管見にふれたものとしては、静岡市立登呂博物館で、4月1日より5月29日まで、『特別展　古代のうつわ　生活の中の道具』が、また、10月1日より11月20日まで京都国立博物館で、『特別展覧会　日本の黎明　考古資料にみる日本文化の東と西』が開催された。千葉県下の弥生時代の遺跡では、大厩遺跡、阿玉台北遺跡出土の土器が展示されていた。

以上のような動向の中にあって、房総の弥生時代研究も一つの転機を迎えつつあると思う。

本年の紀要執筆に関して2名が担当した。その内容については、第Ⅱ章、第Ⅲ章を総論とし第Ⅱ章で県内を対象とする弥生時代の文献を網羅して研究史を綴り、第Ⅲ章では房総弥生文化を概観した。第Ⅳ章、第Ⅴ章は各論とし、特に問題点とされるところ所を抽出し論じた。

第Ⅱ章　研　究　史

研究史を概観するまえに、房総地域における、現在までの弥生時代関係の文献を確認してみると、216篇を数える。その発刊年代をみてみると、明治期1篇　大正期0　昭和初期24篇、昭和20年代14篇、同30年代27篇、同40年代79篇、同50年代71篇で、特に、昭和47年(1972)7篇、48年(1973)17篇、49年(1974)29篇、50年(1975)27篇、51年(1976)29篇、52年(1977)15篇と40年代後半から50年代にかけてかなりの文献が公にされている。しかしそれも、例えば50年では27篇の文献が挙げられるが、その内訳は調査報告23篇、研究2篇、その他2篇、51年度は調査報告22篇、研究4篇、その他3篇である。すなわち、傾向では近年の発掘調査報告書の刊行数の増加に比例するのである。過去には、須和田遺跡、菅生遺跡、宮ノ台遺跡、田子台遺跡に代表された千葉県下の弥生時代遺跡も、広範なものになり、より明確な文化事象が示されてきた感がある。

県内の遺跡を対象とした報告・論文を参考にしながら、弥生時代研究の軌跡を辿ってみたい。

1884年（明治17）に東京の本郷弥生町で、口縁部の欠けた壺形土器が発見された[1]。それは、これまでによく知られていた縄文土器とは異なった形状、文様をもった土器で、10数年後、縄文土器などと区別するため、地名をとって「弥生式土器」と呼称されるようになった。その後、いろいろな名称を付されたが、大正時代にはいってから、弥生式土器の名称は一般的に使われるようになった。

昭和期に入り、出土土器の分類から編年への研究系譜を引くことになる。まず、須和田遺跡の最初の報告がなされる(文献3)。また、のちに南関東の弥生中期の標式遺跡となる宮ノ台遺跡の報告がなされた(文献8)。この遺跡が注意されたのは、石器を伴わない久ケ原遺跡出土弥生土器に対して、各種石器を伴なうという視点からであった。出土した弥生土器は2類に分類される。第一類に分類された土器は、いわゆる宮ノ台式の深鉢形土器で、口縁部上端に指頭により押捺を施し、波状を呈するもの、器面の刷毛目整形痕も留意されている。第二類に分類された土器は、宮ノ台式の壺形土器であり、一部久ケ原式を含む。

須和田遺跡で汎東京湾的な性格を持つ久ケ原式、弥生町式土器とはやや異質な土器である「北関東系土器」の発見が注意されている(文献11)。

1937年（昭和13）から翌年にかけては、菅生遺跡の報告が数篇なされた(文献13～21)。

1939年（昭和14）は、弥生式土器研究では一つの基点となる事象がある。それは、森本六爾・小林行雄による『弥生式土器聚成図録』が発刊されたことである。この発刊により弥生式土器の研究指向を規定することになった。弥生式土器も単なる土器分類から、総体的編年への移行をみせていたが、図録ではひとつの様式をとらえる独自の手法を用い、まとまった遺跡の資料を掲げることで成果を収めた。

1942年（昭和17）、宮ノ台遺跡の補遺篇が発表された(文献23)。ここでは文献８で報告した第一類・第二類土器を宮ノ台式としている。また、その後の増加資料を加えて、宮ノ台式土器論を展開している。南関東を中心とする弥生式及びその系統の土器の研究として、須和田式土器、宮ノ台式土器、久ケ原式土器、弥生町式土器、前野町式土器と編年を呈示している。

1943年（昭和18）、再葬墓遺跡の新田山遺跡が報告された。出土土器は須和田式土器であり、その系列を篦描縄文系列としている。これに対して、宮ノ台式土器などは櫛目文の使用が盛んなので、櫛目縄文系列と称している。

戦後に至り、数篇の菅生遺跡の報告がある[2]。注目される報告では田子台遺跡の報告(文献37)である。戦後房総地方で初めて久ヶ原期の住居址が２軒調査された遺跡で、いずれも胴張り隅丸方形を呈し、このうちの１軒から、床面に接して径３mm前後のガラス製小玉117 個が発見されている。報文中で菊池義次は「南関東弥生式土器編年への一私見」と題して、久ヶ原遺跡出土土器と田子台遺跡出土土器とを対比させて、「久ヶ原式」ないし「弥生町式」の概念規定に対する疑問を述べるとともに、これらの土器のうち、甕形土器と壺形土器を例にあげて、文様構成による土器形式論を展開している。さらに、これとは別に、現在でも見落されている点であるが、当該遺跡の地理的特殊性を考慮するためには、東京湾沿岸地域の海上交通の利用の重要性を含むべきであると、提示していることである。

1957年（昭和32）、茨城県東茨城郡茨城町の長岡中学校の運動場の発掘調査をした際に、隅丸長方形の住居址から一括の７個体の土器が出土し、これらの一括出土土器に対して井上義安が長岡式土器と呼称し、標式遺跡として知見されるようになった[3]。そして当該形式が属する時期を十王台式直前にあてはめ、北関東東部における弥生式土器の編年的序列を、野沢Ⅰ式－同Ⅱ式－足洗式（八重崎式）－　？　－長岡式－十王台式とした。

1960年（昭和35）、この年、杉原荘介は弥生文化を14に地方区分し、弥生時代の暦年代は、前期初めを紀元前 300 年、後期末を紀元後 300 年としている[4]。

昭和30年代後半から40年代にかけて、千葉県内、とりわけ印旛・手賀沼周辺地域で、複合口縁を呈し、頸部無文帯、胴部に文様が施される甕形土器、あるいは頸部に櫛描沈線を持つ甕形土器等の発見例が著しく増し、前述した長岡式土器に類似することから、これらの土器の一部を長岡式土器にあてはめようとする傾向が強かった。

1961年（昭和36）、印旛、手賀沼周辺の埋蔵文化財に関する報告書が出された(文献52)。ここでは、久ケ原式、弥生町式土器を伴う後期文化の分布圏が、旧相模、武蔵、上総、安房と分布し、とりわけ三浦半島及び房総半島の汎東京湾地域内諸遺跡の調査の結集をもとに、両者間の類似性を指摘した。しかしながら、これとは別に印旛・手賀沼周辺地域に発見される北関東系土器と呼称される一群の土器の存在に注目し、これら一群の土器と房総半島に見られる汎東京湾的性格を持つ文化圏－久ケ原式土器文化圏－とを対比して、いずれが主体的であり、客体的であるのか、あるいは混合地域であるのか、などについての問題を投げかけた。さらに、以

上の観点に立って、印旛、手賀沼周辺地域で発見された土器に関して、A群（南関東系弥生式土器群）・B群（北関東系弥生式土器群）・C群（南・北両者の混交せるもの）などに分類してその編年的位置づけを行った。また、これとは別に合口甕棺あるいは、合口壺棺の発見例の中で、南・北両系統の土器の共存している例から、北関東弥生文化編年の細分化への足がかりを南関東弥生文化編年との対比によって求められ得る可能性を論じた。

1967年（昭和42）、杉原荘介は須和田遺跡出土土器を報告するとともに、東京湾西岸また、駿河地方で報告されている、弥生中期弥生式土器の編年系譜を論述している(文献74)。そして、須和田式土器を南関東を中心とする地域における最古の弥生式土器とし、その系統を大洞A′式土器あるいは荒海式土器使用社会などに求めている。その論拠は施文原体2段左撚りとし、晩期縄文式土器終末の踏襲としている。

1968年（昭和43）、『弥生式土器集成』が出された(文献77)。以前刊行された『弥生式土器聚成図録』を踏襲し、新資料を加えている。南関東地方は、第Ⅰ様式から第Ⅴ様式まで分類している。第Ⅰ様式は須和田式土器であり、その形成は、東海地方などからの影響によるものではなく、在地の縄文式土器を基盤としたとしている。第Ⅱ様式は、A・Bに分けられ、Aは小田原式土器とされている。これは従来の小田原式土器前期の土器と須和田式土器の一部をあわせたものである。Bは宮ノ台式土器である。第Ⅲ様式は、いわゆる久ケ原式土器であり、近年、北関東系と称されている土器を第Ⅲ様式に伴なう特殊な土器とし、関東地方東北部の土器の移入品と理解している。第Ⅳ様式は、弥生町式土器、第Ⅴ様式は前野町式土器である。

昭和40年代後半から現在に至るまでの道程は、その遺跡調査件数の増加及び調査面積の広域化に伴い、出土遺構及び遺物資料の増加をもたらした。それはまったくの新知見であったりして、房総半島への弥生文化の東漸に目を見はるものがあった。

方形周溝墓に関しては、多くの研究者が種々の考察を加えた。金井塚良一もその一人であるが、氏の発表した一覧表によると(文献92)、　県下の弥生期に該当するのは、戸張遺跡(文献34)のみである。しかし、同年に市原市南総中遺跡で宮ノ台期の方形周溝墓が報告されている(文献97)。

千葉県都市公社文化財調査事務所が調査した、大森第2遺跡、星久喜遺跡、大廐遺跡、菊間遺跡は、それぞれに弥生期の遺構を確認し、また、種々の問題点を呈示した。

大森第2遺跡は弥生時代中期後半期の住居址を11軒検出している(文献101)。星久喜遺跡は、同じく中期後半期の住居址2軒、土壙3基、方形周溝遺構1基を検出している。標高もあまりない緩斜面に位置しており、低地遺跡とも考えられ、木材集積遺構も確認されている(文献100)。大廐遺跡は、弥生期住居址64軒、土壙3基、特殊遺構3基、V字溝などが検出された(文献117)。特筆に価するのは環濠であるV字溝を確認したことである。占地された台地の端部と、それより若干、内側に入った地点に2本検出されたことは、弥生時代の集落構成をみるうえで貴重な資料を呈示した。菊間遺跡は、弥生期住居址49軒、方形周溝墓3基を検出している(文献118)。

大廐遺跡に比べ、方形周溝墓が設けられているということは、菊間遺跡がよりマジカル的存在という点が指摘される。

これらの遺跡の調査が報告されると、熊野正也は弥生時代に関して、その疑問とする点を次々に呈示していった。まず弥生期住居形態の一つであるベット状遺構については、その初源を弥生時代中期後半とし、集落内に関する祭祀について、ベット状遺構をもつ住居に求めたと推察した(文献122)。そして、この住居に居住する者が集落において、司祭者的性格をもつ者であろうとした。葬制に関しては、方形周溝墓をとり入れた地域と、その地方の伝統的壺(甕)棺墓を継承した地域の文化の相違を葬制の違いでとらえた(文献159)。前述した大廐、菊間遺跡の石器様相に関しても、論述している(文献167)。ただその前段階として、各々の遺跡の集落構成について若干ふれているが、中期後半の様相を大廐遺跡では3段階にわたって営まれたと考えることができると記し、また、菊間遺跡では、3段階に細分される可能性をもっているなどとしているが、それを裏付ける具体的な資料の指摘はなされていない。石器に関して、菊間、大廐遺跡の扁平片刃石斧、のみ形石斧の占める割合が大きいことに注目している。そして、各々の遺跡の石器に対する必要性に深いかかわりがあったのではないだろうかと推論し、木器をつくるため、伐採→製材→加工までの工程をそれぞれが分担し、小地域における共同作業が行なわれていたものとしている。

大廐遺跡、菊間遺跡に関しては、直接に大廐遺跡を調査した、三森俊彦と古内　茂がそれぞれの論考を発表している。これらに関しては、第Ⅳ章と大いに関連をもつので、そちらで論及したいと思う。

弥生時代の後期に目を向けてみると、飯重新畑遺跡、生谷境堀遺跡(文献125)、渡戸遺跡石神遺跡(文献150)などの発掘調査により、従来北関東系土器と呼称されていた一群の土器の発見例が著しくなり、これら一群の土器の地域的特徴が徐々に理解されはじめてきている。とりわけ、熊野正也、柿沼修平により、編年論が展開されたことは大きな成果と言える。熊野正也は、従来言われてきた北関東系土器という定義に疑問を投げかけ、むしろ杉原荘介が弥生式土器集成の中で用いられている南関東地方第Ⅲ様式（久ケ原期）に伴なう特殊な土器という見方をとり、臼井南遺跡出土の土器については、南関東地方の編年上で扱うべきであり、久ケ原式土器の範疇に含まれる特殊な土器であると主張(文献150)した。さらに臼井南遺跡出土土器と現在茨城県地方で形式設定されている長岡式土器、東中根式土器、十王台式土器とを比較して両者の相違を指摘して編年的位置づけを推し進めた(文献136)。

一方、柿沼修平は、印旛沼周辺地域の北関東系土器と称される後期弥生式土器の編年操作を試み、古ー久ヶ原期、中ー弥生町期、新ー前野町期の三期に分類し、これにあてはめる土器形式をA・B・C・Dの4群に類別した(文献127)。このうちA群は久ヶ原式土器との伴出例から久ヶ原期に近いものとし、B・C群は文様構成から十王台期に近い特徴とした。また、D群はA群に近い器形を持つことから、A群とほぼ同時期に属するものと考えた。以上の結果から

北関東系土器の編年的位置づけを、一部は前野町式土器と共伴することは認めながらも、概ね久ヶ原期から弥生町期に併行するものと結論づけた。

現在では、北関東系土器と称される一群の土器が、南関東の編年でいう久ヶ原期に位置づけられることは、ほぼ定説となりつつある。古内　茂もこの問題をとらえ、ほぼ同様な見解を発表している(文献134)が、さらに北関東系土器の初源について言及しているは、ことさら評価されるべきである。

北関東系土器と呼ばれる一群の土器に関し、研究の端緒はさほど時を遡らない時期であり、未だ全貌を理解することは不可能である。編年的位置づけも確固たるものは築かれていないのが現状である。あるいはまた、弥生町期から前野町期、前野町期から古墳時代にかけての研究もほとんどなされていないのが実状のようであり、後期弥生文化研究の立ち遅れが指摘される。

註

1　坪井正五郎「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡有り」『東洋学芸雑誌』第6巻第91号　1889
2　文献25～27、29、30など
3　井上義安「茨城県長岡遺跡の弥生式土器」『史想』第7号　1957
4　杉原荘介「農業の発生と文化の変革」『世界考古学大系』第2巻　弥生時代　1960

〔文　　献〕

文献番号		
1	1911	柴田常恵「下総国海上郡足洗村発見の奇行石器」人類学雑誌第27巻第5号
2	1932	「官幣大社安房神社境内発見古代洞窟遺跡調査報告」神社協会雑誌32－1・4
3	〃	杉原荘介「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」武蔵野第18巻第4・6号
4	1933	小金井良精「安房神社洞窟人骨」史前学雑誌第5巻第1号
5	〃	大場磐雄「安房神社洞窟発掘調査概報」史前学雑誌第5巻第1号
6	1934	八幡一郎「下総国須和田の弥生式土器」人類学雑誌第49巻第9号
7	〃	森本六爾「下総須和田の土器について」人類学雑誌第49巻第10号
8	1935	杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報」考古学第6巻第7号
9	1936	〃　「須和田遺跡に於ける考古学的調査の意義について」考古学第7巻第1・2号
10	〃	杉原荘介「安房に於ける弥生式遺跡について」考古学第7巻第7号
11	1937	稲生典太郎「須和田発見の縄文を有する弥生式土器」先史考古学1－1
12	〃	杉原荘介「須和田遺跡に於いて行ひたる竪穴式住居址の発掘方法」考古学第8巻第2号
13	1938	大場磐雄「千葉県君津郡清川村菅生遺跡の調査」考古学雑誌第28巻第3号
14	〃	〃　「地底の宝庫清川遺跡を発掘して」科学画報27－5
15	〃	〃　「上総菅生遺跡の再調査」国学院大学学友会誌10
16	〃	〃　「上総菅生遺跡」考古学第9巻第3・10号
17	〃	〃　「上総菅生遺跡調査の経過」考古学雑誌第28巻第10号
18	〃	〃　「上総清川村菅生遺跡発掘目録」上代文化第16輯
19	〃	宮本寿吉「上総菅生遺跡調査の経過」房総郷土研究5－9
20	1939	大場磐雄「上総菅生遺跡の一考察（1）」考古学雑誌第29巻第1号
21	〃	〃　「　〃　（2）」　〃　第29巻第3号
22	〃	酒詰仲男「千葉県印旛郡地方遺跡概況」人類学雑誌第54巻第8号
23	1942	杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報―補遺―」古代文化第13巻第7号
24	1943	〃　「下総新田山遺跡調査概報」人類学雑誌第58巻第7号
25	1948	河田　陽「菅生遺跡をめぐって」房総展望2－5
26	〃	村崎　勇「菅生遺跡について」房総展望2－5
27	〃	大場磐雄「千葉県木更津市菅生遺跡の研究」上代文化第18輯
28	1951	清水潤三「千葉県検見川遺跡」日本考古学年報1

29 1951 大場磐雄「千葉県菅生遺跡の再調査」日本考古学年報1
30 〃 大場磐雄「菅生遺跡回顧」房総展望5－4
31 〃 高野忠興「検見川遺跡のハスの実発掘について」房総展望5－7
32 1952 『田子台遺跡関係文書綴』勝山町史蹟研究会
33 〃 平野元三郎「勝山の古代遺跡」房総展望6－8
34 〃 古宮隆信『文京区立柏学園付近戸張遺跡調査概報』
35 1953 平野元三郎・滝口　宏『千葉県郷土史読本』寧楽書房
36 〃 千葉県立安房第一高等学校郷土研究会「千葉県安房郡丸村粟野台竪穴住居址発掘略報」郷土研究第5号
37 1954 早稲田大学考古学研究室『安房勝山田子台遺跡』
38 〃 菊池義次「南関東弥生式土器編年への一私見」『安房勝山田子台遺跡』
39 1955 曽野寿彦「安房勝山田子台遺跡」考古学雑誌第40巻第4号
40 〃 亀井正道「東日本弥生式文化に於ける墓制に就いて」国学院雑誌第56巻第2号
41 〃 神沢勇一「墳墓—東日本—」『日本考古学講座4　弥生文化』
42 1956 滝口　宏「千葉県安房郡田子台遺跡」日本考古学年報5
43 〃 川戸　彰「東金市発見の弥生式土器」国学院大学考古学会会報第43号
44 1957 奈加奈「田子台の遺跡」旭光12－6
45 〃 下津谷達男・横川好富『野田市三ッ堀遺跡』野田市文化財調査報告第一冊
46 1958 『考古資料解説目録』成田山霊光館
47 1959 亀井正道「東日本弥生式文化の墓制」歴史教育第7巻第3号
48 1960 岩崎卓也「千葉県松戸市内における弥生土師遺跡」史潮第71号
49 〃 菊池義次「東日本弥生文化における葬制の問題」歴史教育第8巻第3号
50 1961 「中野台出土の弥生式土器」『千葉市の文化財』千葉市教育委員会
51 〃 君塚好一「千葉県市川市須和田遺跡」日本考古学年報9
52 〃 菊池義次「印旛・手賀沼周辺地域の弥生文化」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査　本編』千葉県教育委員会
53 〃 関　俊彦「松戸市和名ケ谷出土の弥生式土器」立正考古第17号
54 〃 杉原荘介「千葉県千葉市坂月町新田山遺跡の土器」弥生式土器集成2
55 〃 対馬郁夫「明鐘崎の海蝕洞窟」『海』創刊号　富津海洋資料館海の会
56 1963 坂詰秀一「東日本弥生時代墓制把握への一視角」古代文化第10巻
57 〃 坂詰秀一・関　俊彦「南関東弥生時代壺《甕》棺墓小考」立正大学文学部論叢第17号
58 〃 関　俊彦「千葉県八日市場市吉田出土の弥生式土器」立正考古第22号
59 〃 坂詰秀一・関　俊彦「中和倉寒風遺跡」松戸市文化財調査報告第1集

60 1963 木下正史「上本郷長者屋敷遺跡」松戸市文化財調査報告第1集
61 〃 佐藤　昇「千葉県野田市木野崎新町遺跡」若木考古66
62 〃 菊池義次「印旛・手賀沼周辺地域の弥生交化」古代第41号
63 〃 江沢中葉「夷隅町引田峯越台遺蹟概報」総南文化第1号
64 1964 竹内俊文「千葉県市川市菅野町五丁目出土の弥生式土器」考古学集刊第2巻第3号
65 〃 杉原荘介・大塚初重「千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓址」日本考古学協会第30回総会研究発表要旨
66 1965 下津谷達男「野田市提台遺跡」上代文化第35輯
67 〃 熊野正也「須和田遺跡出土の一弥生式土器について」考古学集刊第3巻第2号
68 1966 神沢勇一「弥生文化の発展と地域性－関東－」『日本の考古学Ⅲ』
69 〃 芝崎　孝・三上嘉徳「千葉県海老内台遺跡群の調査報告」下総考古学2
70 1967 杉原荘介「千葉県宮ノ台出土の石器」『案山子』日本考古学協会農業部会
71 〃 岩崎卓也・木下正史「千葉県松戸市長者屋敷遺跡」日本考古学年報15
72 〃 坂詰秀一「千葉県松戸市寒風遺跡」日本考古学年報15
73 〃 市毛　勲・滝山昌彦『市原市周辺地域の調査－若宮遺跡（C地区）－』市原市教育委員会
74 〃 杉原荘介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」考古学集刊第3巻第3号
75 〃 川崎純徳「須和田遺跡出土の北関東系弥生式土器」考古学集刊第3巻第4号
76 1968 杉原荘介・大塚初重「千葉県佐倉市天神前遺跡」日本考古学年報16
77 〃 杉原荘介「南関東地方」『弥生式土器集成　本編』
78 〃 松村　侑・平田美智子「千葉県印旛印西町出土の土器」下総考古学3
79 1969 関　俊彦『東日本弥生時代遺跡地名表－関東地方－』
80 〃 大塚初重・井上裕弘「方形周溝墓の研究」駿台史学第24号
81 〃 杉原荘介「千葉県佐倉市岩名天神前遺跡」日本考古学年報17
82 1970 馬目順一「弥生時代の遺構・遺物」『大谷口』松戸市教育委員会
83 〃 『千葉県記念物所在地図』千葉県教育委員会
84 〃 渡辺正吾「大多喜町船子遺跡の新事例について」総南文化第12号
85 〃 「夷隅町引田と茂原市宮の台弥生遺跡」総南文化第12号
86 1971 栗本佳弘「佐倉市大篠塚遺跡」『埋蔵文化財調査報告』
87 〃 西野　元他『三里塚　新東京国際空港用地内の考古学的調査』千葉県北総公社
88 〃 平野元三郎他『名主山遺跡』名主山遺跡調査団
89 〃 丸子　亘「東金平蔵台遺跡発掘調査概報」千葉県教育委員会
90 〃 杉原荘介・大塚初重「原始農耕文化－弥生時代」『市川市史　第1巻』

91 1972 野口博芳「江子田南総中遺跡方形周溝墓と甕棺について」市原地方史研究 8
92 〃 金井塚良一「関東地方の方形周溝墓」考古学研究第18巻第 4 号
93 〃 伊藤　敢「成田市遠山地区の弥生遺跡」成田史談18
94 〃 森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究」千葉大学教養部研究報告A－5
95 〃 岡崎文喜他『夏見大塚遺跡－夏見台地における弥生時代集落址の調査－』船橋市教育委員会
96 〃 斉藤吉弘「南総中遺跡発掘調査概報」先史第 8 号
97 〃 桑原　護「千葉県南総中遺跡の方形周溝墓」日本考古学協会昭和47年度大会研究発表要旨
98 1973 宮入和博「〔付節〕ピット列遺構・弥生式土器包含層の調査」『小金線』千葉県都市公社
99 〃 真下高幸「車坂遺跡」『京葉』千葉県都市公社
100 〃 柿沼修平「星久喜遺跡」『京葉』千葉県都市公社
101 〃 栗本佳弘他「大森第 2 遺跡」『京葉』千葉県都市公社
102 〃 玉口時雄・阪田正一他『宮脇』
103 〃 坂井利明他『北柏遺跡－発掘調査概報－』
104 〃 栗本佳弘「大森第二遺跡」日本考古学年報24
105 〃 栗本佳弘「車坂遺跡」日本考古学年報24
106 〃 宮入和博他『成田市文化財分布調査報告書』成田市教育委員会
107 〃 『松戸市史』松戸市教育委員会
108 〃 下津谷達男・古宮隆信『中馬場遺跡・妻子原遺跡』東葛上代文化研究会
109 〃 中山吉秀『柏の文化財』柏市教育委員会
110 〃 市毛　勲『千葉県印旛郡印西町下総鶴塚古墳の調査概報』
111 〃 石岡憲雄他『上総菅生遺跡』菅生遺跡調査団
112 〃 白石竹雄他『平台先遺跡』平台先遺跡発掘調査団
113 〃 『流山市大畔台・下花輪第二遺跡調査概報』下花輪第二遺跡調査団
114 〃 山田友治他『佐倉江原台遺跡発掘調査概報　昭和48年度』千葉県教育庁文化課
115 1974 古内　茂・矢戸三男『柏市鴻ノ巣遺跡』千葉県都市公社
116 〃 『千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報』銚子市教育委員会
117 〃 三森俊彦・阪田正一他『市原市大厩遺跡』千葉県都市公社
118 〃 斎木　勝・種田斉吾他『市原市菊間遺跡』千葉県都市公社
119 〃 倉田芳郎『千葉上ノ台遺跡第Ⅰ次調査概報』
120 〃 武田宗久・宍倉昭一郎『千葉市史第 1 巻』

121 1974 種田斉吾・菊池真太郎『木更津市請西遺跡群』千葉県都市公社
122 〃 熊野正也「弥生時代集落構造の一考察－ベット状遺構をもつ住居址を中心として－」史館第２号
123 〃 杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部考古学研究室
124 〃 関根孝夫『諏訪原遺跡』松戸市文化財調査報告第５集
125 〃 桑原　護他『飯重』佐倉市教育委員会
126 〃 柿沼修平「佐倉市畔田川崎遺跡の弥生式土器」史館第３号
127 〃 柿沼修平「印旛沼周辺地域の弥生時代遺跡」なわ第13号
128 〃 矢吹俊男「千葉県佐倉市下根出土の古式土師式土器」なわ第13号
129 〃 田川　良「八千代市佐山遺跡出土の弥生式土器」なわ第13号
130 〃 柿沼修平・内田儀久「佐倉市の弥生時代遺跡」なわ第13号
131 〃 柿沼修平・高橋健一「酒々井町下岩橋連蔵遺跡の弥生式土器」なわ第13号
132 〃 小川和博「成田市の弥生時代遺跡の分布について」なわ第13号
133 〃 古内　茂「印旛地区の弥生時代遺跡」なわ第13号
134 〃 古内　茂「房総における北関東系土器の出現と展開」ふさ第５・６合併号
135 〃 千葉健造「印西町下宿遺跡出土の土器」ふさ第５・６合併号
136 〃 熊野正也「南関東地方における弥生文化の研究（１）－佐倉市臼井南遺跡出土の土器－」史館第４号
137 〃 藤下昌信・宮入和博『成田市の文化財』５号
138 〃 佐藤武雄「薬園台発見の弥生式土器」資料館だより第３号　船橋市郷土資料館
139 〃 樋口清之・金子皓彦・青木　豊「千葉県西国吉遺跡の発掘調査」考古学ジャーナル№96
140 〃 坂井利明『成田新幹線関係遺跡分布調査報告書』千葉県都市公社
141 〃 中川成夫『千葉県夷隅川流域分布調査報告書（埋蔵及び石造文化財資料編）』
142 〃 野口義磨「重文壺形土器」月刊文化財５月号
143 1975 倉田芳郎『千葉上ノ台遺跡第Ⅱ次調査概報』
144 〃 天野　努他『八千代市村上遺跡群』千葉県都市公社
145 〃 『おおびた遺跡－八千代市少年自然の家建設地内遺跡－』おおびた遺跡発掘調査団　八千代市教育委員会
146 〃 米内邦男『大崎台遺跡』
147 〃 熊野正也『殿台遺跡』市川市文化財調査報告第２集
148 〃 小川和博・工藤英行『埋蔵文化財調査報告書２』成田市教育委員会
149 〃 玉口時雄『千葉県安房郡千倉町健田遺跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会

150 1975 伊礼正雄・熊野正也『臼井南』
151 〃 中川成夫『新田野貝塚－千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚－』立教大学考古学研究会調査報告２　立教大学考古学研究会
152 〃 『千葉県館山市条里遺構調査報告書』館山市条里遺跡調査会
153 〃 椙山林継『木更津市請西遺跡－昭和49年度発掘調査概報－』
154 〃 新田栄治「有角石斧の再検討」考古学雑誌第60巻第４号
155 〃 倉田芳郎・上篠朝宏『千葉干潟桜井遺跡調査概要』
156 〃 海野道義・柿沼修平『円能遺跡発掘調査概報』佐倉市教育委員会
157 〃 八幡一郎他『夏見大塚遺跡－夏見台地における弥生時代・奈良・平安時代集落址の調査－』
158 〃 松井義郎「墳丘下の遺構」『板附古墳群－千葉県山武郡成東町板附古墳群発掘調査報告－』山武考古学研究会
159 〃 熊野正也「南関東地方における弥生文化の研究（２）－特に房総半島における葬制について－」史館第５号
160 〃 山田友治「江原台遺跡」日本考古学年報26
161 〃 下津谷達男「宝蓮坊遺跡」日本考古学年報26
162 〃 榊原松司「夏見大塚遺跡（第３次）」日本考古学年報26
163 〃 滝口　宏他『遺跡日吉倉』日吉倉遺跡調査団
164 〃 矢戸三男・菊池真太郎他『阿玉台北遺跡』千葉県都市公社
165 〃 小山　勲「史料館蔵の弥生式土器」かみしき14
166 〃 杉山晋作・安藤鴻基『清水谷遺跡』
167 1976 熊野正也「南関東地方における弥生文化の研究（３）－特に大厩・菊間両遺跡出土の石器を中心として－」史館第６号
168 〃 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和49・50年－』千葉県教育庁文化課
169 〃 中山吉秀「清戸遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』千葉県文化財センター
170 〃 古内　茂「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』千葉県文化財センター
117 〃 田中新史「南向原遺跡」『南向原－古墳・方形周溝墓・住居址の調査－』
172 〃 星田享二「東日本弥生時代初頭の土器と墓制－再葬墓の研究－」史館第７号
173 〃 熊野正也・佐々木和博「杉ノ木台遺跡出土の弥生式土器について」史館第７号
174 〃 菊地義次・対馬郁夫他「千葉県君津郡袖ケ浦町大竹遺跡」遺跡確認・大竹第12号古墳調査報告書
175 〃 『夏見台第３次－弥生時代・古墳時代集落址の調査』夏見台遺跡第３次発掘調

査団
176　1976　海野道義他『江原台第１遺跡確認調査』佐倉市文化財報告
177　〃　古宮隆信他『中馬場遺跡第３次発掘調査報告書』
178　〃　対馬郁夫「加茂遺跡Ｃ地点の調査」上総国分寺台発掘調査概要Ⅲ
179　〃　半田堅三「台遺跡Ｂ地点の調査」上総国分寺台発掘調査概要Ⅲ
180　〃　滝口　宏編『千葉県市原市加茂Ｃ地点発掘調査報告書』上総国分寺台遺跡調査団
181　〃　大塚初重『千葉県君津市道祖神裏古墳調査概報』
182　〃　関根孝夫「網目様撚糸文のある後期弥生土器について」ＭＵＳＥＵＭちば－千葉県博物館協会研究紀要－第７号
183　〃　須田　勉他『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団　市原市教育委員会
184　〃　『夏見台（第２次）－弥生時代及び古墳時代の集落址の調査』船橋市教育委員会
185　〃　『上総国分寺台発掘調査概要』上総国分寺台発掘調査団、市原市教育委員会
186　〃　『木更津市請西遺跡－昭和50年度－』木更津市教育委員会
187　〃　熊野正也「宮ノ台式土器に関する覚え書き」房総の郷土史第４号
188　〃　熊野正也他『臼井南－石神第Ⅲ地点発掘調査報告書－』
189　〃　熊野正也「杉ノ木台遺跡第１次調査」昭和50年度市川博物館年報
190　〃　伊東重敏「山王辺田遺跡030号住居址」ひだみち№4　常陸考古学研究所報
191　〃　熊野正也『須和田遺跡のはなし』市立市川博物館友の会
192　〃　森　尚登『遺構確認調査報告書－国立歴史民俗博物館（仮称）』千葉県文化財センター
193　〃　米内邦雄『佐倉市埋蔵文化財報告（２）－志津西ノ台遺跡－』志津西ノ台遺跡調査団
194　〃　三浦和信他『吉高家老地遺跡－弥生土師集落址の調査－』吉高家老地遺跡調査会
195　〃　柿沼修平他『多古台遺跡群調査概報』日本文化財研究所
196　1977　『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和47・48年－』千葉県教育庁文化課
197　〃　田村言行他『江原台第１遺跡発掘調査報告２』佐倉市文化財調査報告
198　〃　高田　博他『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ－第１次・第２次調査－』千葉県文化財センター
199　〃　桑原　護『間野台・古屋敷』佐倉市臼井中学校建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告
200　〃　三森俊彦「市原市大厩遺跡の弥生文化」ＭＵＳＥＵＭちば－千葉県博物館協会

研究紀要－第８号
201　1977　古内　茂「宮ノ台式土器の変遷について－最近の調査例を中心として－」船橋考古第７号
202　〃　倉田芳郎『千葉・上ノ台遺跡第Ⅲ次調査概報』上ノ台遺跡調査団　千葉市教育委員会
203　〃　沼沢　豊・深沢克友『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター
204　〃　鷹野光行「遺構とその出土遺物」『西広貝塚－上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ－』上総国分寺台遺跡調査団
205　〃　深沢克友「東寺山石神遺跡出土弥生式土器の編年的位置づけについて」『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター
206　〃　沼沢　豊「千葉県東寺山石神遺跡の調査」考古学ジャーナル№133
207　〃　熊野正也「入門講座・弥生土器－南関東１－」考古学ジャーナル№135
208　〃　熊野正也「入門講座・弥生土器－南関東２－」考古学ジャーナル№138
209　〃　熊野正也「入門講座・弥生土器－南関東３－」考古学ジャーナル№139
210　1978　『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和51年－』千葉県教育庁文化課　刊行予定

追　補

211　1934　八幡一郎「関東地方の弥生式磨石斧」人類学雑誌第49巻４号
212　1974　田中新史「国分寺台の遺跡分布調査概要」『東関部多古墳群』
213　1975　中村恵次・山田友治『千葉県長生郡睦沢村浅間山１号墳発掘調査報告書』浅間山１号墳発掘調査団
214　1971　滝口　宏・市毛　勲『大日山古墳』千葉県教育委員会
215　1975　『袖ケ浦町文化財分布調査報告書－埋蔵文化財－』袖ケ浦町教育委員会
216　1977　野中　徹『木更津市埋蔵文化財分布調査報告書－矢那川流域周辺遺跡詳細分布調査－』木更津市教育委員会

（斎木・深沢編　1978，３，15）

第Ⅲ章　弥生文化の概要と変遷

第1節　弥　生　中　期　文　化

遺跡分布状態（第1図）

県下における弥生中期に該当する遺跡は、現在のところ48ケ所確認されている。○印は須和田式土器の出土遺跡であり、●印は中期後半期の宮ノ台式土器の出土遺跡及び、それより若干古い様相を有する土器の出土遺跡である。前者は、現在までのところ8ケ所あり、海岸部あるいは山間部にも散在している。後者は、42ケ所確認されており、調査地の粗密はあるにしても、千葉、市原付近に集中している。

総体的にみると、比較的河川の発達していることが、ある点において一つの条件になっているように看取される。千葉、市原周辺は、都川、村田川、養老川、内陸部においては、印旛沼に注ぐ、鹿島川、また、外洋に注ぐ夷隅川地域がそれにあたるのではなかろうか。

文化様相（第2図）[1]

次に、房総における弥生時代中期の文化様相を概観してみたい。掲げた項目は、住居形態、埋葬、土器、金属器、木器で、これ以外のものはその他として一括した。

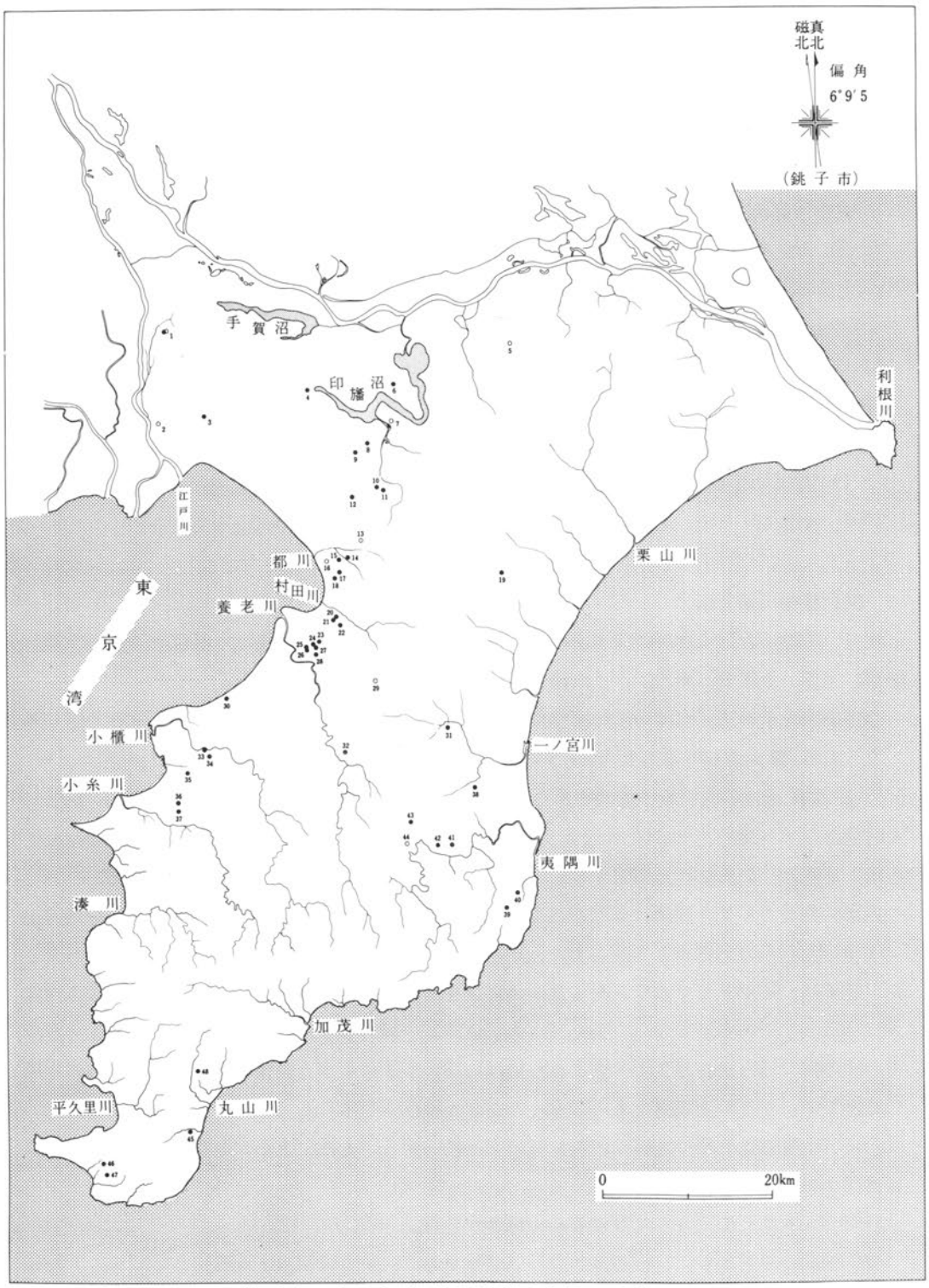
弥生中期後半の宮ノ台期の住居形態は、まず平面形でみると、楕円形となるもの、隅丸長方形となるもの、隅丸方形となるもの、不整円形となるものの4種類に分類される[2]。大きさは、短辺5m　長辺6m前後のものが一般的である。ただ、菊間遺跡の第25号、38号、40号住居址[3]、また、大厩遺跡のY－38号、Y－44号址のように大形住居址も確認される[4]。三殿台遺跡では、この大形住居を単位として営まれた集団をとらえ集落構成を4つの小期に設定した論が発表されている[5]。

内部の施設として、周溝は多くが設けられている。柱穴は、各コーナーに偏して、対角線上に4本穿たれるのを基本とする。また、炉に対する2本の柱穴間に1本設けられる場合もある。掘り込みはしっかりしており、深さは60cm前後を測るものが多い。大形住居でも主柱穴の設備数はほぼ同じである。しかし、例えば、大厩遺跡Y－44号址の柱穴は、深さ1.2～1.3mを測り、その掘り込みは長径3.1～2.7m　短径1.75～1.3mも測る長楕円形であり、住居の規模に比例して、かなり大規模なものであったことが推察される[6]。

炉は、中央部よりやや北側に偏在するのを一般とする。また、土器が埋設される場合、四隅に付帯小ピットを伴う場合もある[7]。

貯蔵ピットは、南壁寄りに設けられる場合が多い。

弥生中期の埋葬として、再葬墓と方形周溝墓がある。前者に該当する遺跡としては、天神前遺跡[8]、新田山遺跡[9]、中野台遺跡[10]、船子遺跡[11]、ふじ塚遺跡[12]　が挙げられる。これらの遺跡では、掘



第Ⅰ図　房総弥生中期遺跡分布図（1/800,000）

第1表　弥生中期遺跡表

遺跡No.	遺跡名	所在地		文献
1	大谷口	松戸市大字大谷口	須，宮	82
2	須和田	市川市須和田2丁目	須，宮	3,74,90,191
3	法蓮寺山	船橋市藤原町1－225－4 他	宮	98
4	佐山谷	八千代市佐山谷	宮	126
5	石田	成田市土室字石田	須	106,142
6	六合	印旛郡印旛村六合	宮	52
7	天神前	佐倉市岩名396	須，（土壙墓）	65,76,81,123
8	生谷新畑	〃　飯重字新畑		—
9	畔田川崎	〃　畔田	宮	126
10	山梨向井	印旛郡四街道町	宮	52
11	中野	〃　〃　中野地先	宮	168
12	川戸殿台	〃　四街道町	宮	52
13	新田山	千葉市坂月町字山王小字新田山	須，（土壙墓）	24,54,120
14	城の腰	〃　大宮町城の腰	宮	—
15	星久喜	〃　星久喜町271－1	中期	100,120
16	中野台	〃　千葉寺町字中野台	須	120
17	大森第2	〃　大森町222他	中期	101,104,120
18	七廻塚古墳	〃　生実町峠の台	—	120
19	平蔵台	東金市松之郷字金谷	宮	89
20	菊間	市原市菊間字北野	宮	118,167,187,201
21	菊間手長台貝塚	〃　〃	宮	196
22	大厩	〃　大厩	宮	117,167,187,200,201
23	若宮	〃　山木地内若宮	宮	73
24	向原台	〃　国分寺台郡本	宮	212
25	代	〃　〃　根田	宮	212
26	台遺跡B地点	〃　根田字松山425他	宮	168,179
27	村上東山	〃　村上東山	宮	—
28	東向原	〃　国分寺台藤井字東向原	宮	—
29	—	〃　皿木	須（車崎正彦氏教示）	—
30	蔵波砦跡	君津郡袖ケ浦町蔵波	宮	168
31	宮ノ台	茂原市綱島	宮	8,23,70,85
32	南総中	市原市牛久町	宮	91,96,97,196
33	菅生	木更津市菅生字睦喜鶴岡	宮	111
34	清水谷	〃　〃　字清水谷1063～7	中期	166,168
35	請西	〃　請西字山伏作1902～3 他	宮	153,168
36	八重原	君津市八重原	中期	—
37	道祖神裏古墳(下)	〃	宮	181
38	浅間山1号墳(下)	長生郡睦沢村下之郷字根崎	宮	213
39	No.244	夷隅郡大原町根	宮	141
40	No.273	〃　大原5986	宮	141
41	No.333	〃　夷隅町引田嶺台	宮	141
42	No.349	〃　〃　峰谷	宮？天王山併行	141
43	No.405	〃　大多喜町小土呂255－1	宮	141
44	船子	〃　〃　大多喜女子高	須，野沢	84,141
45	—	安房郡千倉町瀬戸	宮（小畑清氏所蔵資料）	—
46	ふじ塚	館山市藤原浜田ふじ塚	（土壙墓？）	94
47	—	〃　犬石	宮（対馬郁夫氏所蔵資料）	—
48	粟野台	安房郡丸山町石堂粟野台	宮	36

り窪めた凹地に須和田式土器が埋置されていた。規模を、掲図する天神前第1号墓壙、第2号墓壙で示すと、まず、第1号墓壙は、長径84cm、短径75cmの楕円形状を示し、掘り込み深さ約20cm、表土から墓壙底面まで65cmを測り、壺形土器3個体が埋置されていた。第2号墓壙は、長径110cm　短径106cmの不整円形を示し、表土から墓壙底面まで52cmを測り、壺形土器7個体、鉢形に近い甕形土器1個体が埋置されていた。[13]

方形周溝墓を確認した遺跡としては、星久喜遺跡[14]　菊間遺跡[15]　南総中遺跡[16]　が挙げられる。南総中遺跡K—21号方形周溝墓は、北東溝8.3m、南東溝8.4m、幅1.2～1.8m、深さ0.6mを測り、各四隅が切れる。その内側は、東西10mで　中央部に長径2m　短径1mの楕円形の土壙が検出される。この期の方形周溝墓は、いわゆる各コーナー部が切れる形態で、方台部に土壙が確認される場合とされない場合がある。規模は前述の南総中遺跡K－21号方形周溝墓に近似する。

以上、埋葬に関しては再葬墓と方形周溝墓をみてきた。ここで問題となるのは、壺及び甕形土器を納骨器として利用する再葬墓である。つまり、この方法は遺骨を一度洗骨してから、骨だけを土器内に収納したものなのである。従って、洗骨する以前の遺体をどのようにしたかが疑問として残る。ここで推論するのは、洗骨以前の仮埋葬地の存在であろう。腐敗を一応の目的とした場合、まず考えられるのは、土壙状の施設への埋葬ではなかろうか。現状では、再葬墓施設のみの確認であるが、より広域的な調査を進めれば、この一段階前の埋葬施設をとらえることが可能と思われる。

県内弥生時代の葬制は、前代よりの再葬墓が、中期後半までみられる。それが壺（甕）棺墓として後期に継承される。一方、中期後半の初頭に、西日本より方形周溝墓という葬制が伝播するのであるが、この葬制をいち早く取り入れる地域と、以前として旧代の葬制を継承する地域とがでてくる。

土器は、須和田式土器、宮ノ台式土器、また、この間にいわゆる小田原式土器を設ける場合もある。

須和田式土器は、市川市須和田遺跡出土土器を標式としたものである。[17]器形は、壺、広口壺、甕、鉢の4種あるが、主体は壺及び甕である。

壺形土器は、大形のものが多く、長頸を呈するものが多い。最大径を胴中位か、上部にもち、肩部が張る場合もある。口縁部は多くの場合、外反する。施文は地文に縄文を用い、口縁から胴上半部に施され、各文様帯は横位の沈線で区画される。区画された各部位には、沈線で、重三角文、菱形文、変形工字文、重弧文が配され、その内側をヘラ状工具にて刺突文を充填している。

甕形土器は、いわゆる半精製土器としてとらえられる。口縁部は平縁で外反する器形が多い。肩部はもつものとないものとがある。胴部は球形を呈する場合や、一段の稜を有する場合もある。文様は、口縁部から胴部にかけて縄文を施文し、平行沈線文、波状沈線文を加える。胴下

半部には壺形土器と同様、擦痕を残すものも多い。

宮ノ台式土器は、茂原市綱島、宮ノ台遺跡出土土器を標式としたものである。[18] 器形は、壺、広口壺、深鉢、浅鉢などがある。

壺形土器は、前代に比べかなり小形化する。口縁部は外反し、曲線を描いて頸部に移行する。頸部は、長頸や筒状を呈することなく、胴部へと移行する。底部は一般に安定感をもつ。胴部は球状を呈して、最大径を胴中央部にもつものと、下脹れで最大径を胴下半部にもつものとがある。施文は、地文として刷毛目調整を施してあるのがほとんどである。文様区画は多くが肩部・胴部にみられ、櫛状工具による、平行沈線文、擬流水文、[19] 重弧文、また、縄文を沈線で区画した、結紐文、舌状文など、その施文構成は多い。

深鉢形土器は、口縁部が外反し、胴部があまり張らずに底部に移行する。器面はそのほとんどが刷毛目調整を施す。その上面に羽状条痕を施文するものもある。口縁部上端は指頭もしくはヘラ状工具にて、押捺圧痕を施している。

弥生中期後半に伴出する石器群は、大形蛤刃石斧・抉入石斧・扁平片刃石斧・鑿形石器・有角石器などがあり、個々の形状などより、機能分化があったと推察される。[20]

この期の石器として、一括出土した、大厩遺跡Ｙ－47号址を取り挙げたい。[21]　この住居址は、住居址３軒と重複関係にあり、長径７ｍ　短径5.5ｍを測る隅丸方形を呈す。出土土器より宮ノ台期とされている。石器は、抉入石斧４点　扁平片刃石斧３点　鑿形石斧２点　両刃石斧１点　砥石２点である。

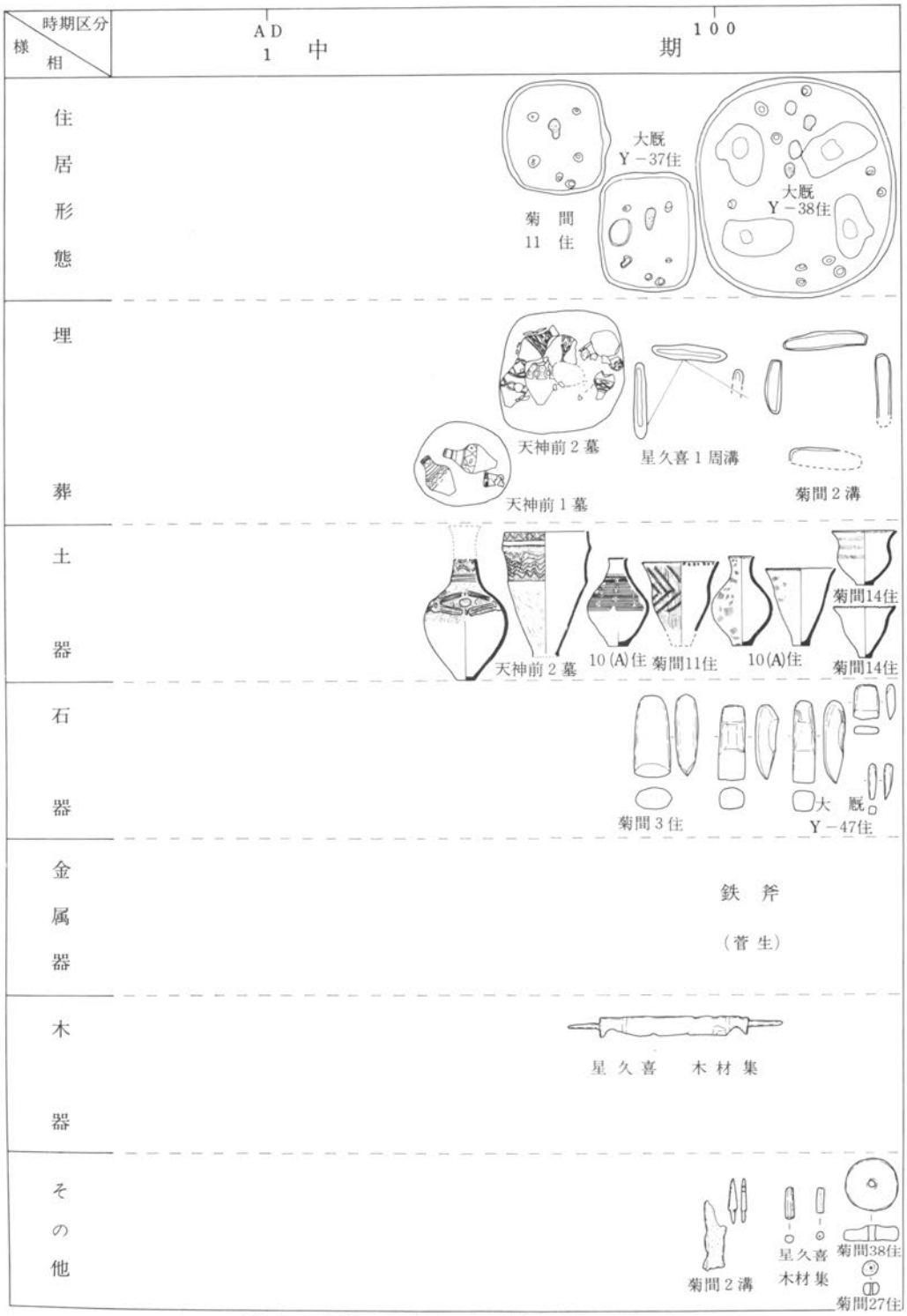
抉入石斧で最大のものは、長さ20.2cm、最小のもので、長さ9.2㎝を測り、４点のうち３点は砂岩製、他は安山岩製である。形状等は全く同じであるが、最小のものは頭部が丸味を帯びる。

扁平片刃石斧は、刃部が長四角形状を示すものと、山形を示すものとがある。

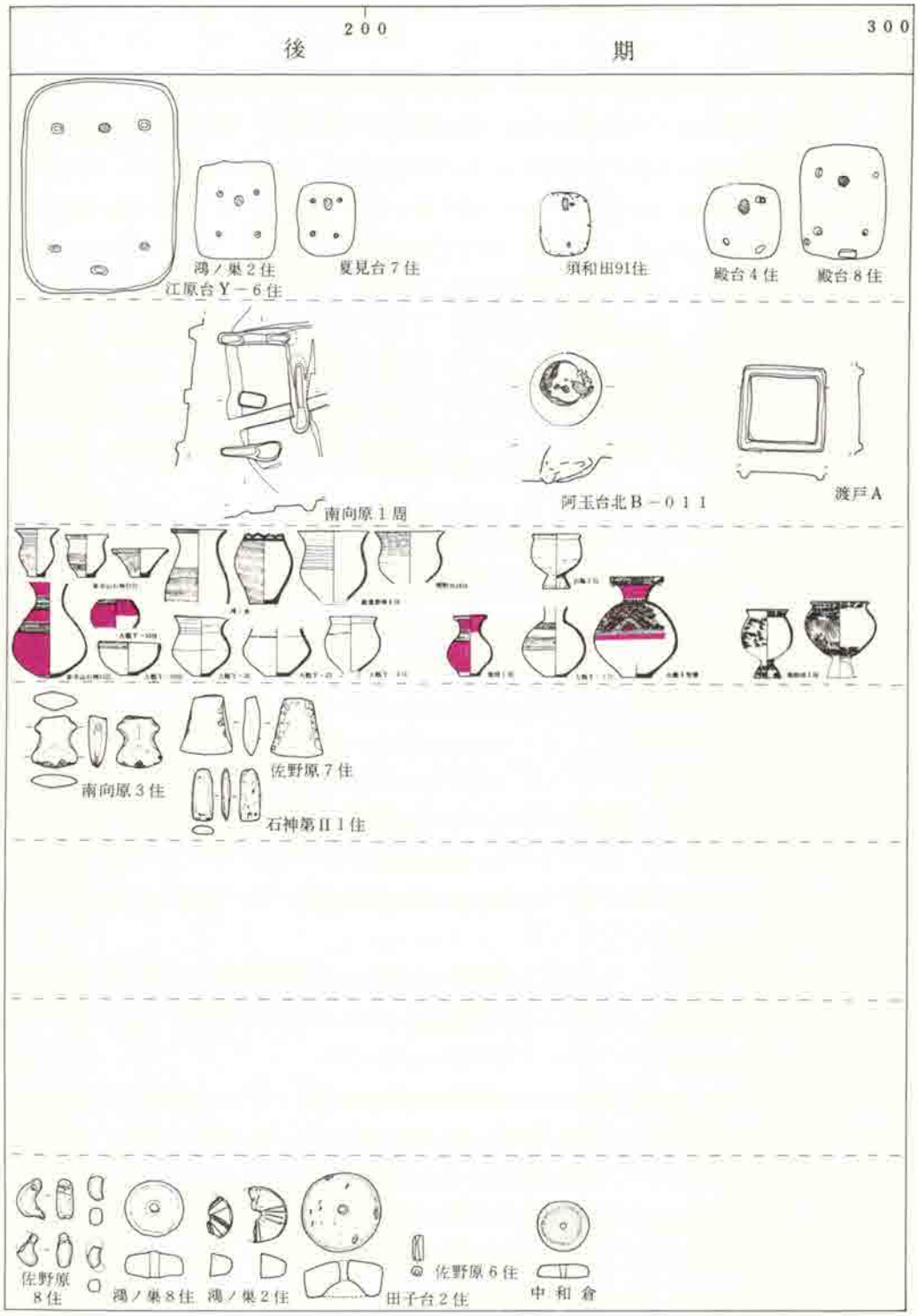
鑿形石斧は、一つが断面方柱形を呈し、刃部は稜をもたせず、ゆるやかな曲線で示されている。もう一つは、長さ9.3㎝を測り、若干大形となる。断面台形を示し、正面と刃部との間に稜がつくられている。

両刃石斧とするものは、報告書では鑿形石斧とされている。[22] しかし、鑿という機能上の規定をするならば、必然的に片刃でなければならない。本址の石器群では、太形蛤刃石斧を欠いているが、あるいは、この両刃石斧は機能上太形蛤刃石斧に近いものであったのではなかろうか。また、握り部には、２ケ所にわたって赤彩が施されている。石器にこのようなものを施す自体、呪術的なものを感じさせる。

ここで注目すべきは、住居址の南壁寄りの貯蔵穴内より、抉入石斧２点と両刃石斧が一括出土したことである。通常は、壺形土器などの出土をみるが、生産用具である石器を収納していたことは、特異である。両刃石斧が赤彩されていることからも何か、特別の意味があったのかとも思われる。



第2図　房総弥生時代の文化様相（縮尺不統一）


200
300
後
期
鴻ノ巣2住
江原台Y－6住
夏見台7住
須和田91住
殿台4住
殿台8住
南向原1周
阿玉台北B－011
渡戸A
南向原3住
佐野原7住
石神第II1住
佐野原
8住
鴻ノ巣8住
鴻ノ巣2住
田子台2住
佐野原6住
中和倉

金属器に関しては、木更津市菅生遺跡で弥生中期後半期に、短冊状の鉄斧の伴なうことが確認されている[23]。

木器について、弥生中期に伴うものは、千葉市星久喜遺跡の木材集積遺構内より出土した「ちまき」がある[24]。2点出土しており、1点は、長さ76.4cm　幅6.6cm　厚さ2.8cmで断面がやや丸味を帯びた四角形状を示す。左右両端のいわゆる受け部は、長さ約12cmほどが、径2cmを測る断面円形状に削られている。また、左右に抉り部をもつ。もう1点は、片方の受け部を欠損しているが、長さ75cm(推定)、幅7.2cm　厚さ2.9cmを測り、形状などまったく同じである。

現在のところ、調査は台地上もしくは微高地に求められ、集落址が調査対象にあげられているため、生産地である、水田、低地などに目を向けられない。事実、星久喜遺跡出土遺物のように低湿地などよりの出土もあるので、集落址の後背湿地や水田面の調査も重要と考えられる。

その他の遺物として、骨角器では、ト占の行なわれた痕跡として、焦痕を有する肩胛骨、また、骨鏃が出土している[25]。前者は、対岸の三浦半島の間口洞窟、毘沙門C洞窟などより、久ケ原式土器に伴って出土している。

土製品では、紡錘車、ガラス製品として、ガラス玉などが出土している。

石器を除いた石製品では、管玉、また、出土状態に関して再考すべきであるが石製匂玉などが出土している[26]。

主要遺跡とその出土遺物

須和田遺跡（第3図1～3）

市川市須和田2丁目に在る。

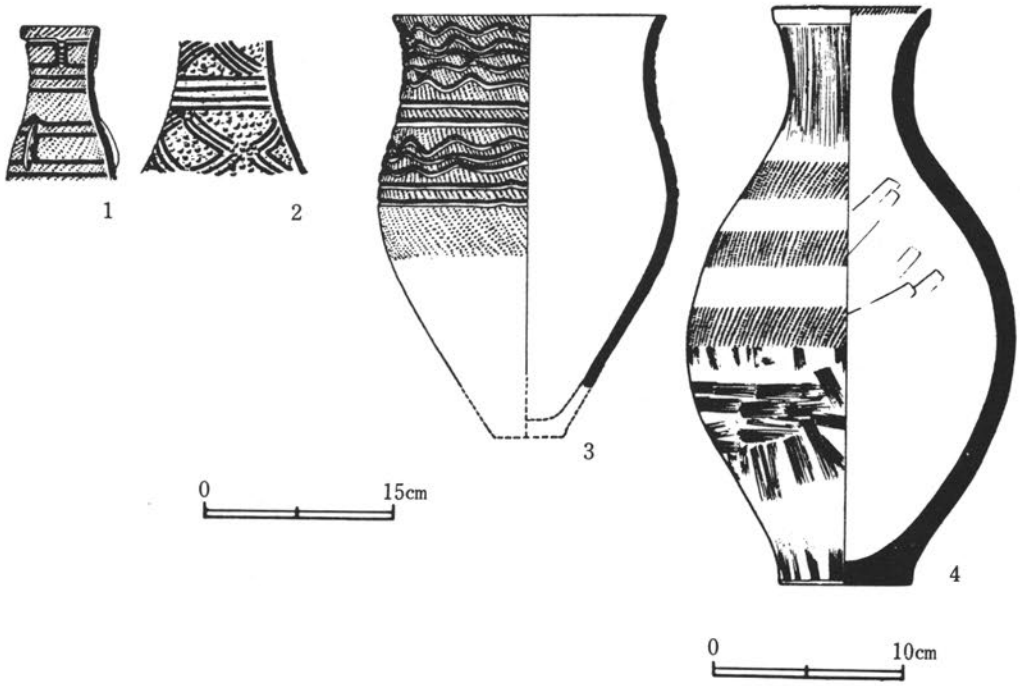
遺跡は、東側を国分谷、西側を江戸川によって分断された国分台台地の先端部に立地する。標高5m前後の沖積段丘上に営まれており、台地基部には、千葉第1段丘、第2段丘を確認する。遺跡の南方には沖積平野が広がり、また、現在、鉄道を敷いている付近は、幅約500mの市川砂州が形成されている。

遺跡は弥生時代中期から、平安時代までの各々の遺構を含む複合遺跡であり、その主体は古墳時代以降の集落遺構である。報告された須和田式土器は、その伴出遺構はとらえられず、遺物包含層中とされている。

1は壺形土器で、底部を欠損する。口径約10cmを測る小形土器で、口縁がわずかに開き、頸部ではあまりすぼまらず、胴部に移行している。地文は、一様に縄文を施文し、横位の沈線を周回している。また、縦位の隆帯を付し、刻みを施している部分もある。

2は、壺型土器の頸部から肩部に移行する部分である。頸部で4単位の横位沈線を周回させている。他の部分には、重三角文や連繋菱形文を沈線で施文している。また、その区画内をヘラ状工具により刺突を加えている。

3は甕形土器であり、推定器高33cm、口径21cm、胴径23.8cmを測る。器形は、口縁がわ



第3図　須和田遺跡（1～3）・法蓮寺山遺跡(4)出土土器（1/4・1/6）（杉原・1971）（宮入他・1973）

ずかに開き、最大径を胴部の上位に有し、すぼまりながら底部に移行している。地文は、縄文を口唇端より胴部まで一様に施文している。その上面に横位に、頸部と胴部に太描きの沈線を周回させ、また、口縁部と肩部には、不規則に波状を呈しながら、沈線を施文している。

法蓮寺山遺跡（第3図4）

船橋市藤原町1－225－4外に在る。

大局的にみて、大きく開析している大柏谷に面する一支谷の南面に位置している。対岸の北方約400 mに姥山貝塚が在り、こちらは台地そのものが、急斜面であるのに対し、法蓮寺山遺跡の立地する左岸は緩斜面である。標高は16 mを測り、北方との水田面との比高は7 m前後である。

遺跡の調査は、台地東側の肩部と低地面の調査であり、縄文前期黒浜期の住居址2軒、諸磯期の住居址1軒と、古墳時代和泉期の住居址2軒、歴史時代の住居址1軒、先土器時代包含層などが確認された。

弥生時代の遺構は全く認められなかったが、壺形土器1点と数点の破片が包含層より検出さ

れた。

4は、器高30cm、口径8.4cm、胴径17.2cm、底径6.8cmを測る。口縁部はわずかに外反し、外面に稜を有す。胴は長胴で肩部の張りはない。地文は刷毛目調整であり、頸部は縦位、胴下半部は横位と縦位に施されている。肩部及び胴部には、施文原体L･Rを用いた縄文帯を3段にわたって施文している。また、口縁部内面にも同じ原体の施文を行なっている。

天神前遺跡（第4図～第9図）

佐倉市岩名396に在る。

遺跡は、印旛沼の南方の台地上にあり、北東を印旛沼に開析する支谷があり、西側は、鹿島川の沖積地が広がる。標高は約30mを測り、水田面との比高は、25m前後を示す。

発見された遺構は、7ケ所の再葬墓であり、出土した土器は、壺形土器17点と甕形土器3点の合計20点である。

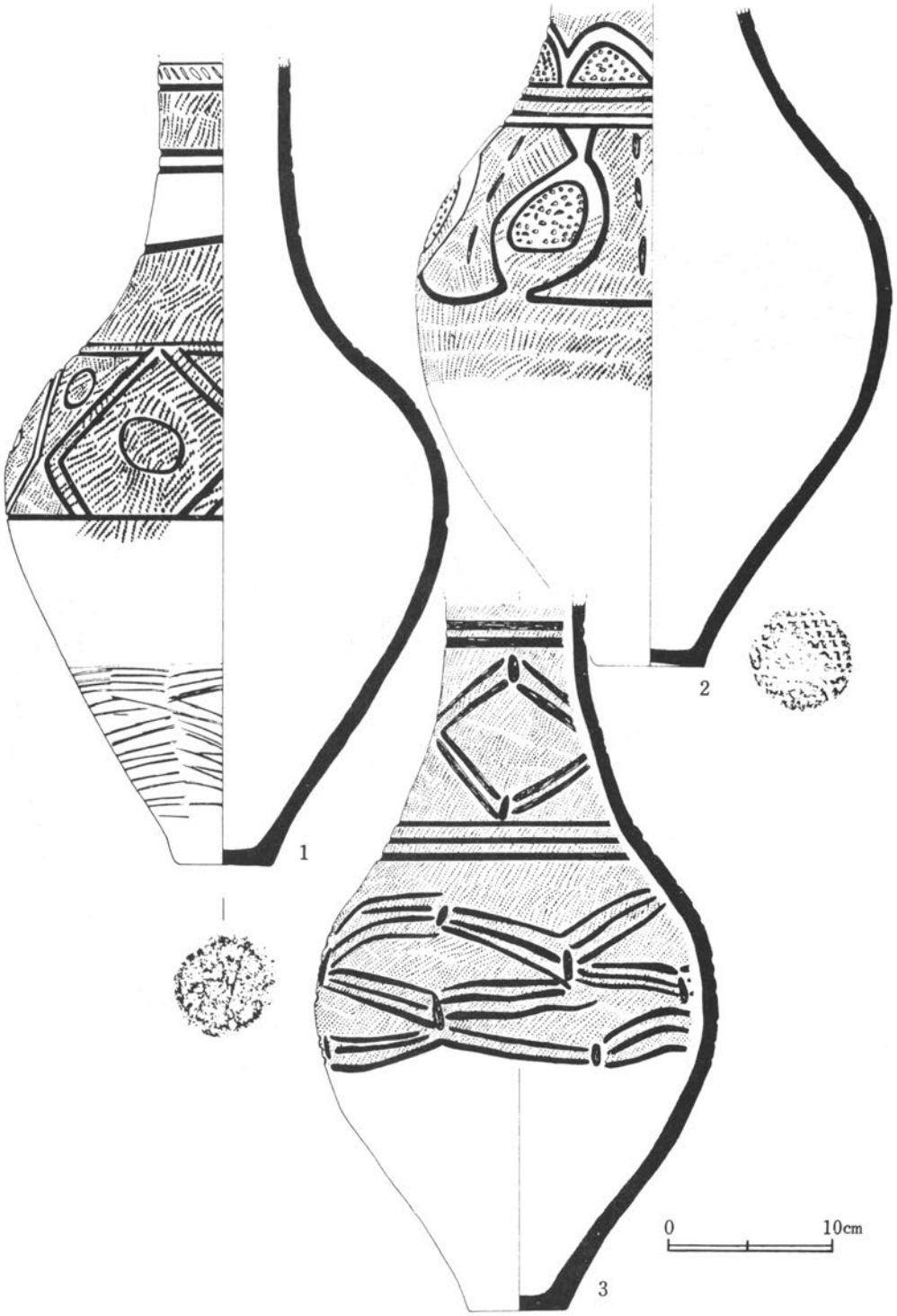
1は、口縁部を欠損する壺形土器。現器高48cm、頸径8cm、胴径26.6cm、底径5.8cmを測る。筒状の頸部を有し、肩部は張らず、最大径を胴上部に有す。頸部への施文は、横位の沈線を数条周回させ、各文様帯を区画している。肩部から胴部にかけては、地文に施文原体L･Rを用いた縄文を横方向より施文している。その上面に沈線で頸部・肩部・胴部と区画する如く、沈線を周回させ、また、胴部には、菱形連繋文と円形文を配している。胴下半部には擦痕が認められる。

2は同じく口縁部を欠損する壺形土器。現器高39cm、胴径28.6cm、底径6.5cmを測る。球状に脹らむ胴部を有し、最大径は胴部のほぼ中位にある。地文は施文原体L・Rを用いた縄文を、1単位ずつ横方向より施文、肩部で4条の沈線を周回させ、頸部文様帯と胴部文様帯と分離させている。各文様帯は、太描きの沈線により、半弧状文、円形文を施し、その区画内を、ヘラ状工具による刺突文を充塡している。また、胴部文様帯には、列点状に縦長の沈線を垂下施文している。底部は網代痕を残している。

3は、筒状の頸部と弧状の胴部を有する壺形土器。頸径8.4cm、胴径24.2cm、底径5.8cmを測る。地文は2と同じく施文原体L・Rを用いた縄文が施され、その上面に、連繋菱形沈線文を施文している。なお、胴部に施文された文様は、やや退化したような特徴が窺われる。

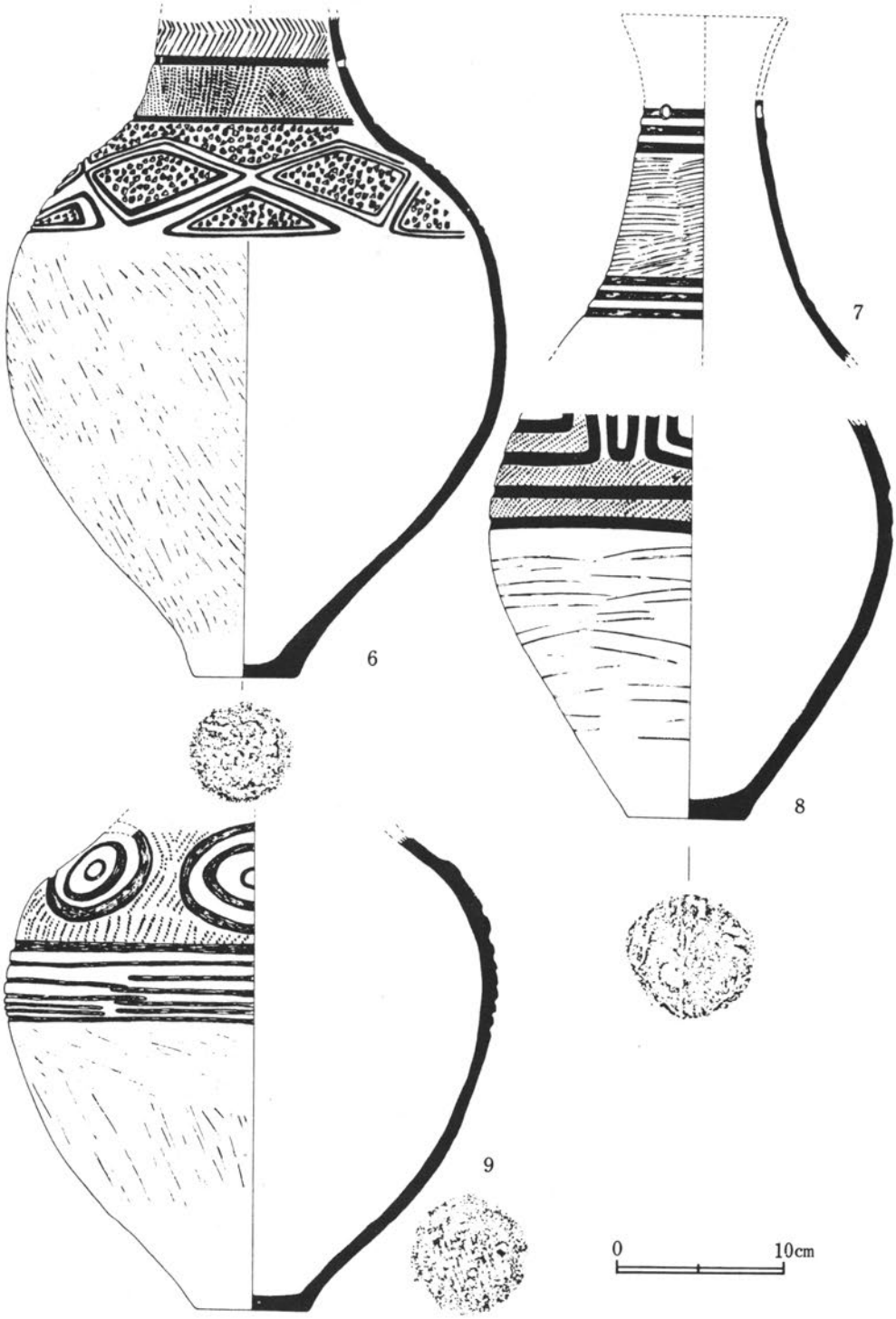
4は、口縁部を欠損する壺形土器。現器高43cm、頸径8cm、胴径29.6cm、底径5.8cmを測る。器形は、細い頸部に比べ、胴部が球状に張る。施文は、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施し、頸部下半に4条の沈線を周回させ、各文様帯を区画している。太描きの沈線文は、連繋した菱形文の退化形態で、1本目と4本目の沈線を連接し、各接合部には円形沈線文を配す。底部は網代底である。

5は、胴下部に補修孔をもつ壺形土器。現存高44cm、頸径7.6cm、胴径28.7cm、底径6

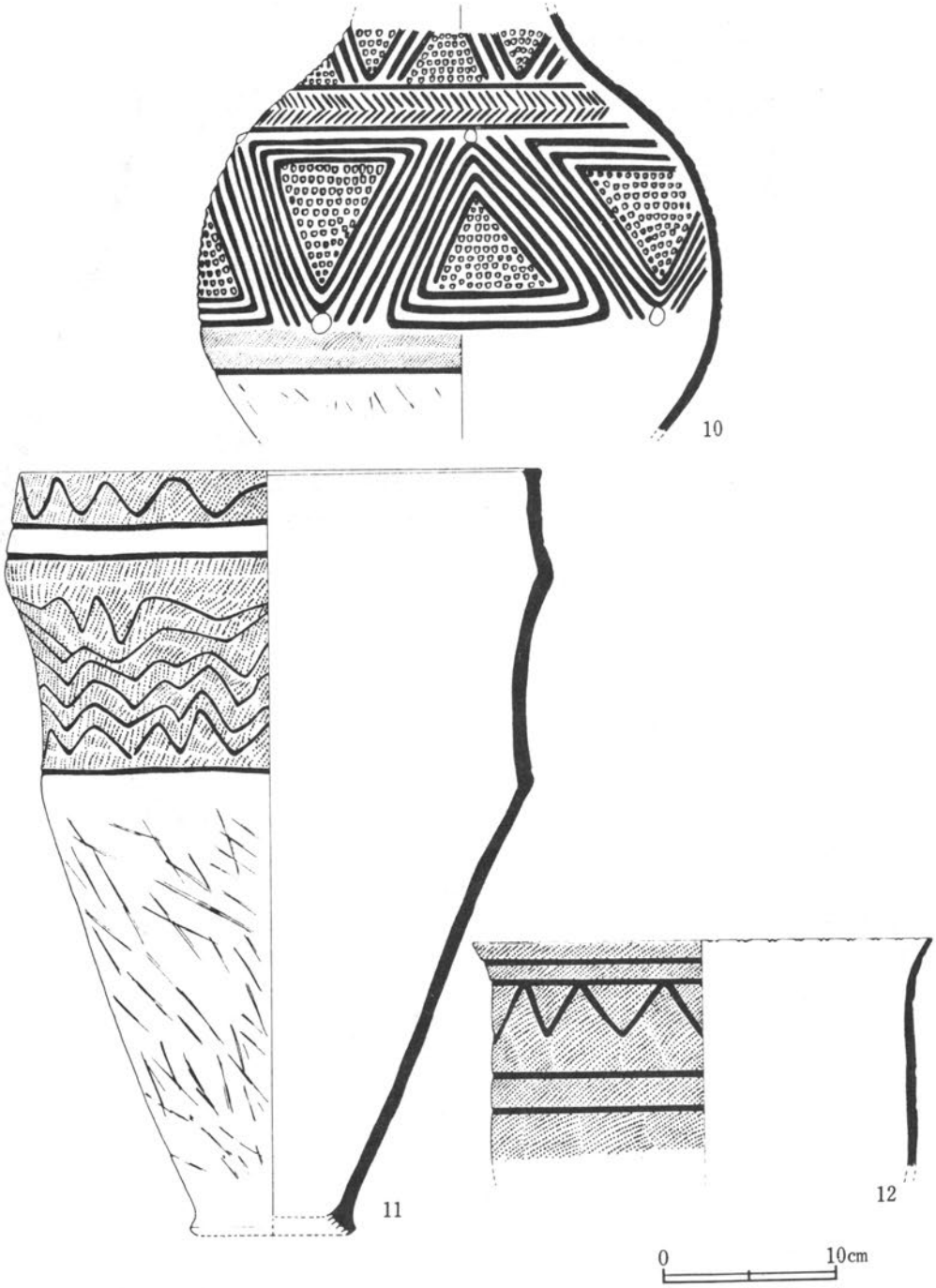


第4図　天神前遺跡出土土器(1)・（1/4）（杉原・1974）

第５図　天神前遺跡出土土器(2)・（1/4）（杉原・1974）



第6図　天神前遺跡出土土器(3)・（1/4）（杉原・1974）



第７図　天神前遺跡出土土器(4)・（1/4）（杉原・1974）

cmを測る。胴部は球状を呈し、最大経が胴上部にある。文様帯は頸部、肩部、胴部とに分かれている。頸部は、縄文施文部と擦痕部とが、沈線で区画されている。肩部は、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施文し、その上面に半月状の沈線を施し、その文様帯間に矢羽根状の沈線文様帯を配している。胴部は擦痕が認められる。底部は網代底である。

6は、胴部が球状を呈する壺形土器。現器高39.4cm、頸径10.8cm、胴径29.8cm、底径6cmを測る。文様帯は頸部と肩部で、胴部には擦痕を認める。肩部への施文は、沈線による菱形文、重三角文を施し、内面はヘラ状工具による刺突を加えている。

7は、頸部のみの遺存である。器形は口縁部に移行するに従い、すぼまる。口縁部と肩部への移行部には、横位の沈線を周回させ区画している。頸部には擦痕を認める。

8は、胴部以下を遺存する壺形土器。胴径24cm、底径7cmを測る。施文は胴部に認められるが、全形を窺うことはできない。地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施し、その上面にきわめて太い沈線による意匠文を認める。胴下半部には擦痕を認める。

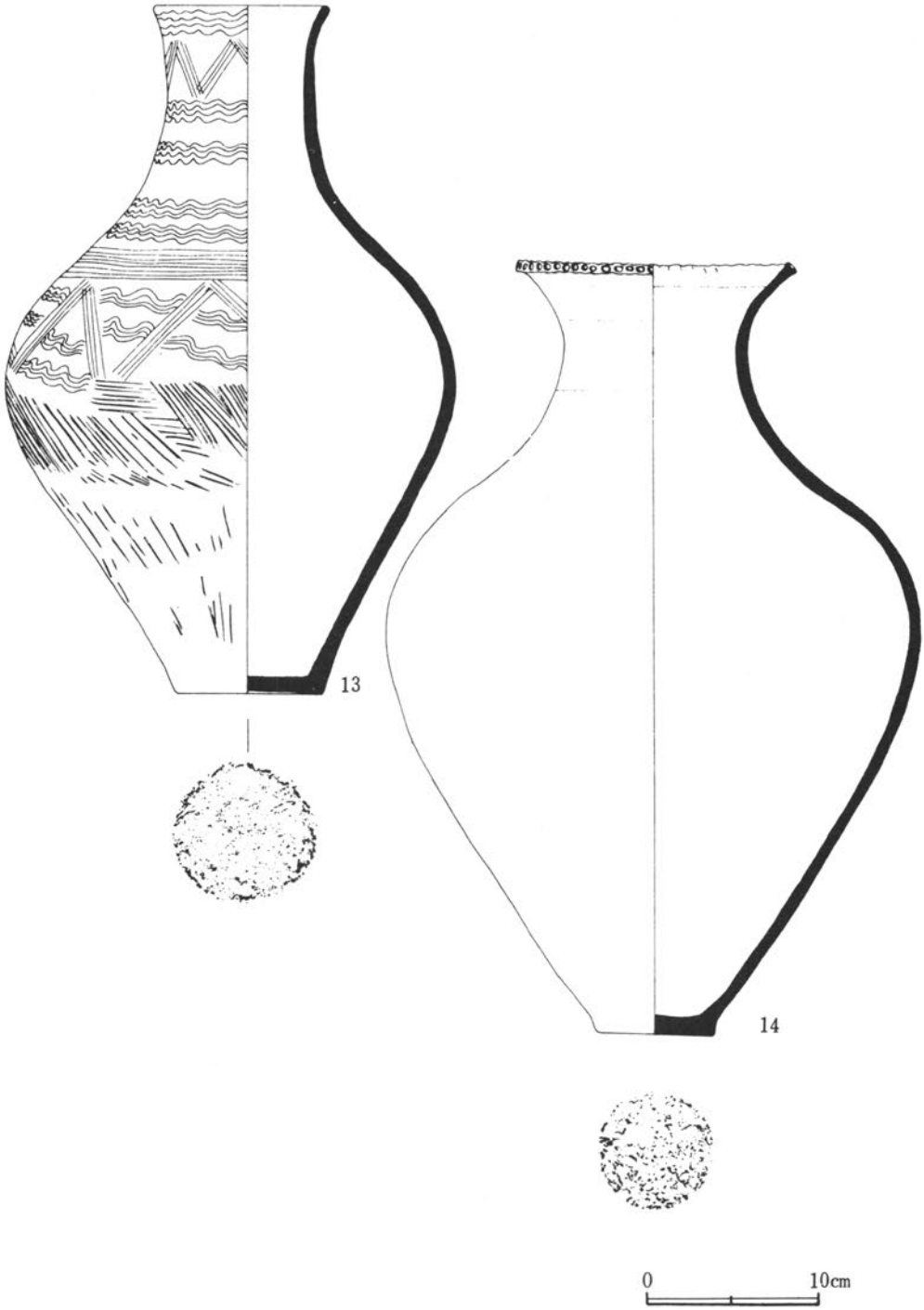
9は、胴部が球状を呈する壺形土器。胴径29.2cm、底径6.5cmを測る。肩部には、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を施し、その上面に三重円形沈線文を配す。胴部には、横位に数条の沈線を施し、下半部には擦痕を認める。底部は網代底である。

10は、口縁と底部を欠損する壺形土器。胴径30cmを測る。器形は球状を示す。肩部文様帯と胴部文様帯を沈線で分けており、各々重三角沈線文を配し、その区画内を刺突文で充填している。また、重三角沈線文の各頂部には、突起帯を付している。胴下半部には斜行細縄文を施し、下端を沈線で区画する。

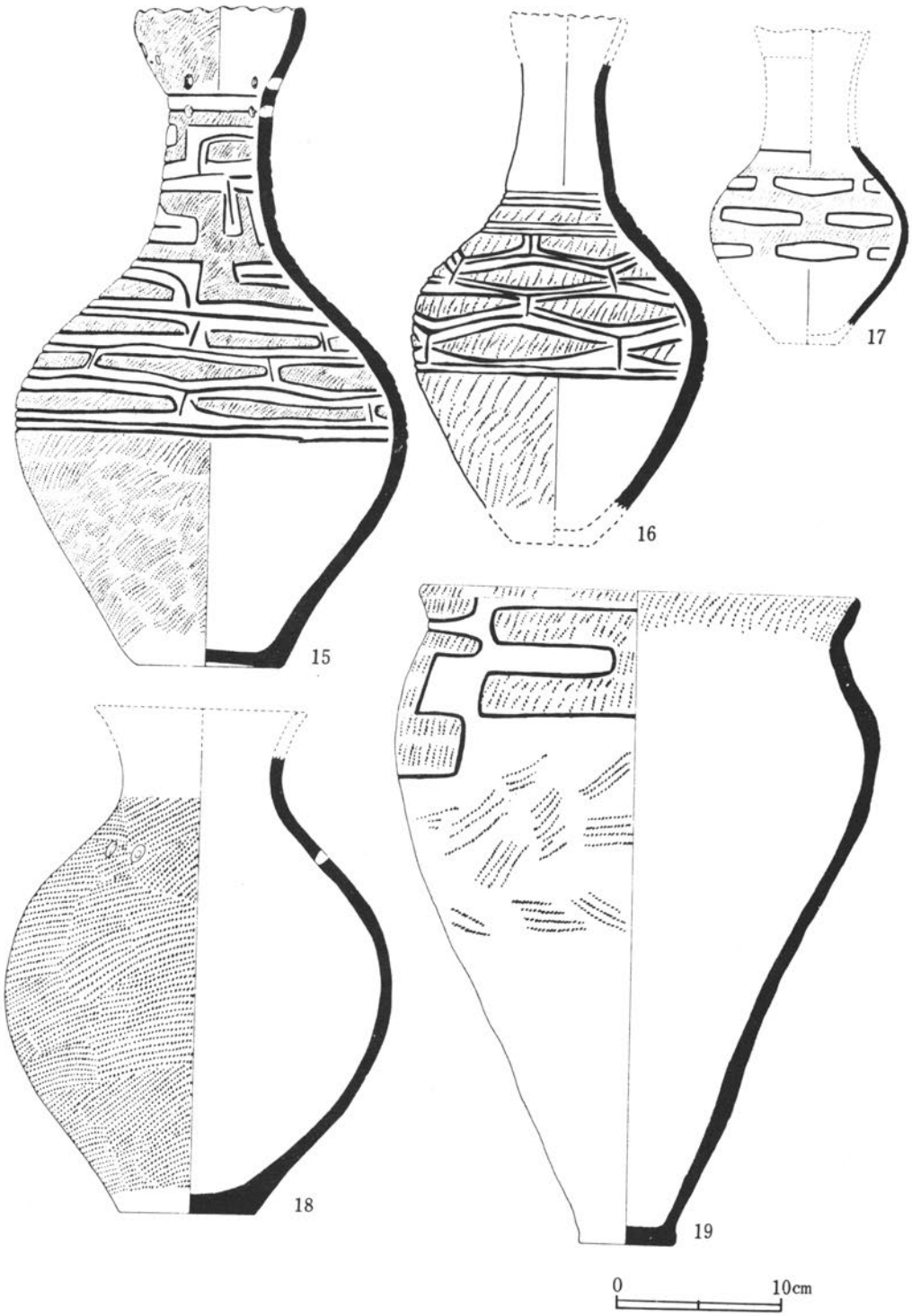
11は、ほぼ完形に近い甕形土器。器高44cm、口径30cm、胴径28.4cm、底径9.6cmを測る。器形は、広口で頸部と胴部で「く」の字形に屈曲し、直線的に底部に移行する。口唇上は平坦で、断面四角形である。文様構成は、地文に施文原体L・Rを用いた縄文を、口縁部より胴部上半まで施文し、胴下半部には擦痕を認める。縄文を地文とする器面は、各文様帯を沈線で区画し、その一部を磨消している。意匠文として、波状沈線文を施している。

12は、口縁部のみを遺存する甕形土器。口径26.4cm、胴径24.4cmを測る。口縁部は若干外反し、頸部から胴部にかけてほぼ直立している。器面には一様に施文原体L・Rを用いた縄文を施文し、横位の沈線で文様帯を区画している。頸部文様帯には、鋸歯状沈線文を施文する。

13は、完形の壺形土器。器高40cm、口径10cm、胴径26.3cm、底径8.4cmを測る。器形は口縁がわずかに外反し、頸部から裾を広げる様に、肩部へ移行する。最大径は胴部のやや上位にある。口縁は平縁であり、器面には4本単位の櫛状工具により、波状沈線文及び山形状沈線文を付す。まず、口縁部に1段の波状沈線文、ついで各単位が独立する山形状沈線文、肩部にかけて4段の波状沈線文、肩部と胴部の文様帯区画に2段の平行沈線文、そして胴部には、3段の波状沈線を施した上に、山形状沈線文を配している。胴下半部には



第8図　天神前遺跡出土土器(5)・（1/4）（杉原・1974）



第９図　天神前遺跡出土土器(6)・（¼）（杉原・1974）

擦痕を認める。底部は布目痕を残す。

14は、無文の壺形土器。器高44cm、口径15.8cm、胴径31cm、底径6.8cmを測る。器形は、口縁部が大きく外反し、最大径を胴上半部にもつ。口縁部外面には稜を有し、その部分には押捺による列点が配されている。

15は、ほぼ完形の壺形土器で、器高40cm、口径10cm、胴径23.6cm、底径8.5cmを測る。口縁部が波状口縁で若干内湾ぎみに開き、頸部との間に2個一対の穿孔を有する。頸部は長く、胴部にかけてゆるやかに移行する。胴部は球状を呈し、底部は比較的大きい。地文は、報告書によると、4段左撚りの施文原体によるとされている。この縄文を器面一様に施し、その上に、変形工字文を数段重ね（胴部は3段）その部分の区画内を磨消す。

16は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。現器高27cm、頸径5cm、胴径18cmを測る。器形は、15を若干小形化したものに近い。文様構成は縄文地文上に、変形工字文を4段重ね、その部分の区画内を磨消している。また、残った縄文地文内は、赤彩されている。

17は、胴径12cmを測る小形壺形土器である。施文は、肩部下半から胴部にかけてあり、簡素化された工字文を認め、沈線による区画内は磨消されている。

18は、口縁部を欠損する壺形土器。現器高28cm、頸径9.5cm、胴径23.2cm、底径8.1cmを測る。胴部は球状を呈し、安定した底部をもつ。器面には一様に縄文が施文される。

19は、ほぼ完形の甕形土器。現器高39.5cm、口径26cm、胴径29.2cm、底径5.8cmを測る。口縁部は一度屈曲してから外反し、胴部は逆円錐状に底部に至る。底部は器高に比べかなり小さい。地文は縄文で、壺形土器と同じような施文原体を用いている。施文は、口唇上と口縁内面、また胴部に施され、沈線による工字文の外側を磨消されている。

以上紹介した土器のうち、第1号墓壙からは、1と13が、第2号墓壙から、2～4、11、15～18が、第3号墓壙から、5、12、14、第4号墓壙から、19、第5号墓壙から、6、7、第6号墓壙から、8、第7号墓壙から、9、10が出土している。

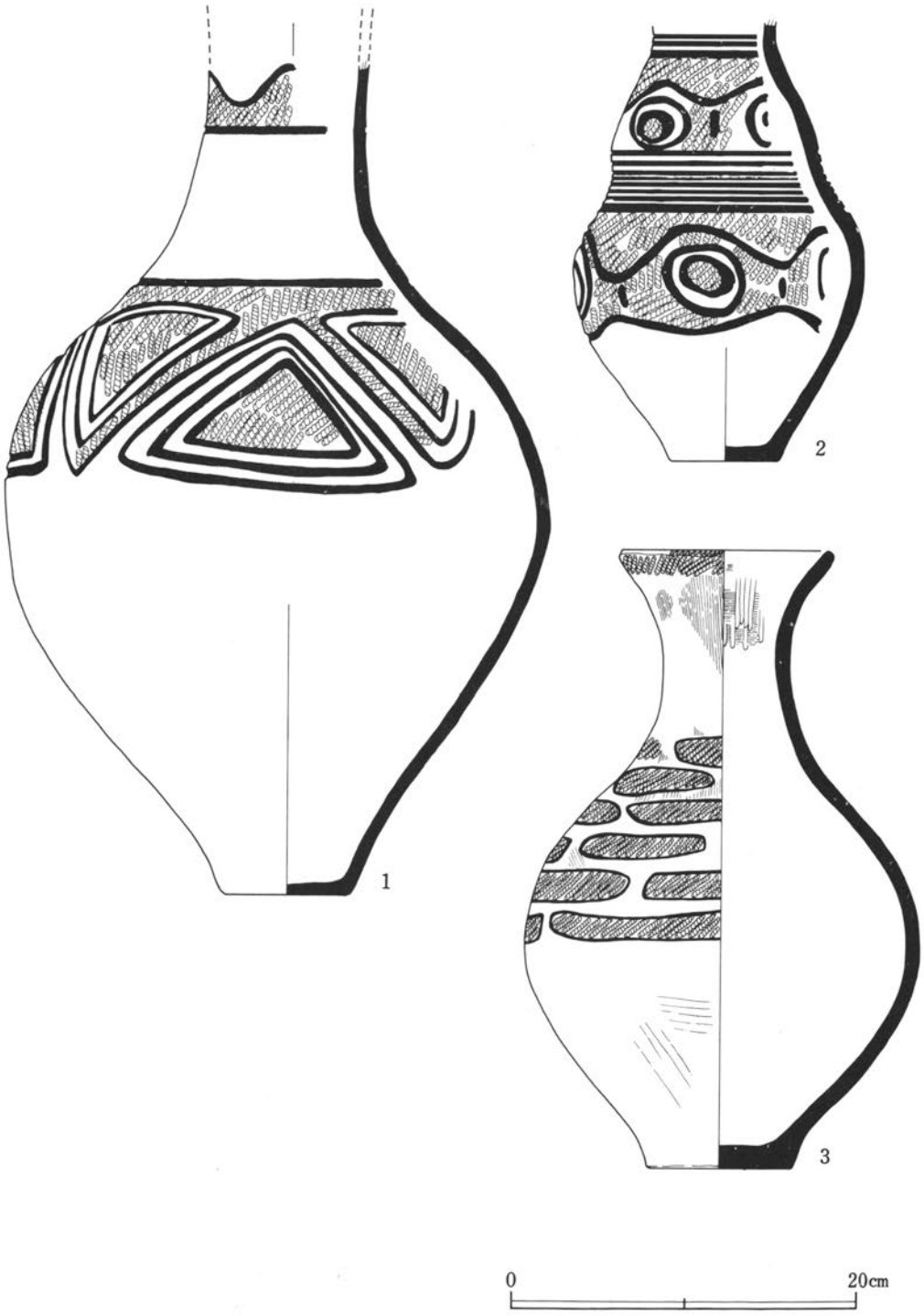
新田山遺跡（第10図）

千葉市坂月町字山王小字新田山に在る。

東京湾に流下する都川の右岸台地上に立地する。標高は約20mで、南方の都川沖積地の水田面との比高は10m前後である。立地状態は、都川によって開析された支谷を、直接望む台地上で、急峻な斜面を有する。発見当時に、遺物の出土状態の特異性が指摘されていたが、これはのちに、いわゆる再葬墓ととらえられた。

掲図する1、2は、昭和18年の杉原荘介の報告に紹介されているが、ここに再測した。

1は、口縁部を欠損する大形壺形土器。頸径9.2cm、胴径31.2cm、底径7.1cm、器厚0.7cmを測る。文様構成は、太い沈線による施文と単節縄文による。沈線による施文は、頸部と胴上部に認め、頸部では横位に、その上面は波状に、また、胴上部には横位と重三角文



第10図　新田山遺跡（1、2）・物社(3)出土土器（¼）

状に施す。縄文は、施文原体L・Rを用いたものを、肩部の重三角文沈線区画内を充填するように施文する。頸部と胴下半部の無文帯には、横位のナデ調整を認める。施文順は、まず器面一様にナデ調整→沈線周回及び区画→縄文充填である。底面は網代底である。胎土内には砂粒を含み、器面の剝脱は顕著、焼成はやや不良である。

2も口縁部を欠損する壺形土器である。頸径7.1cm、胴径16.9cm、底径6.2cm、器高0.8cmを測る。器形は、頸れ部が2ケ所あり、胴部は球状を呈する。一部残る口縁部の破片によると、口縁はわずかに外反しながら、高さを有する。施文は胴部と同様に、円形沈線と波状沈線による文様構成と思われる。地文は、施文原体L・Rを用いた縄文を横方向より施文し、ナデ調整を施したのち、頸れ部は、数条(下部の頸れ部は8条)の横位の沈線が周回、胴部には、波状に沈線を施し、その増幅部には円形の沈線を加え、接点には、縦長に列点状の沈線を施す。以上のように施文順は、縄文→ナデ調整→沈線である。底部には木葉痕を認める。色調は淡褐色、胎土には小礫、砂粒を含む。1、2とも須和田式土器の特徴を有する。

星久喜遺跡（第11・12図）

千葉市星久喜町271－2に在る。

遺跡は、東京湾に流下する都川によって形成され、都川沖積地より分離した仁戸名支谷に突きでた台地の西端に位置しており、標高7mから12mを測る緩斜面上に立地している。

発見された遺構は、弥生期の遺構で住居址2軒、方形周溝墓1基、土壙1基、木材集積遺構1ケ所があり、古墳時代の集落と重複している。

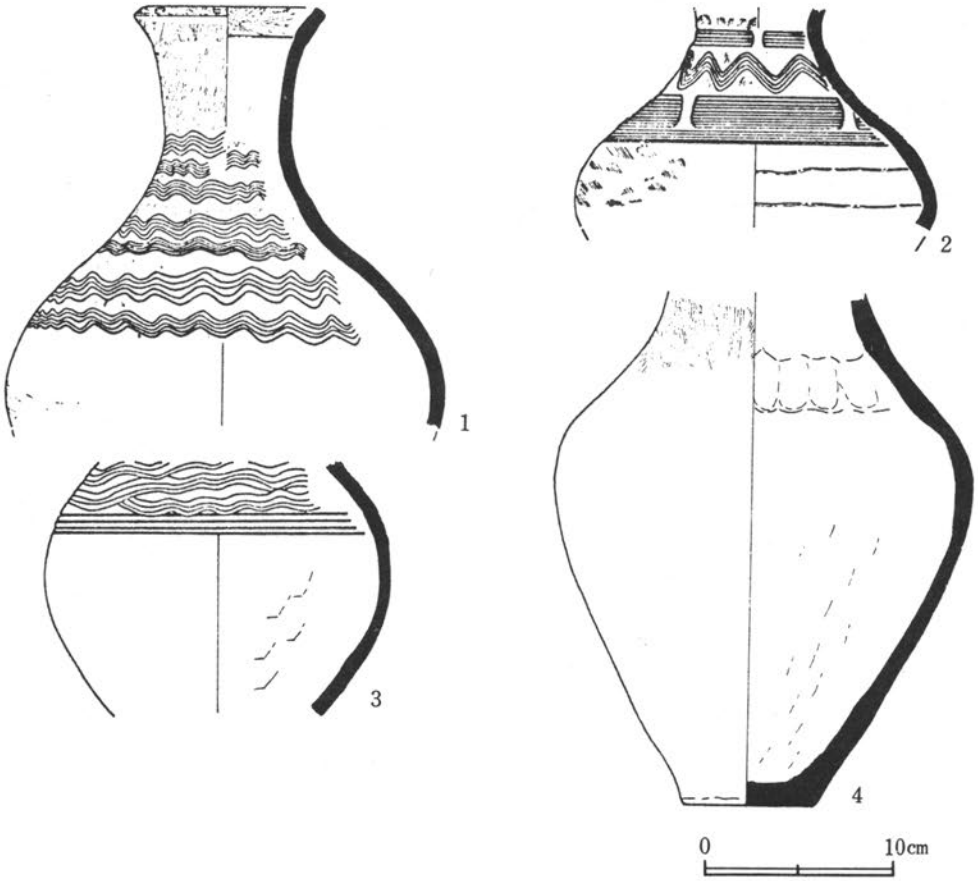
1は、胴下半部を欠損する壺形土器。口径9.2cm、頸径6.6cm、胴径23.2cmを測る。器形は、口縁が内側に折り返され、稜をもつ。胴部の最大径は、若干上位に位置するものと思われる。器面には、一様に刷毛目調整を施しており、また、口縁部内面も横位に行なわれている。頸部から肩部にかけては、5本単位の波状沈線文が施文されている。

2は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。頸径6.6cm、胴径18.1cmを測る。頸部から胴部にかけて、かなり広がる器形である。施文は、内外器面とも刷毛目調整を認め、外面はその上に櫛状工具により、擬流水文、波状沈線文を施している。上位より、擬流水文、波状沈線文、擬流水文、平行沈線文を配す。

3は、胴部のみ遺存する壺形土器。胴径18.3cmを測る。器形は球形を呈す。施文は肩部に認められ、4本単位の櫛状工具により、波状沈線文、また、胴部文様帯との区画に平行沈線文を周回させている。他の器面はヘラ整形を認める。

4は、口縁部を欠損する壺形土器。胴径22.1cm、底径6.8cmを測る。器形は、肩部がかなり張る形態で、最大径を胴上半部に有す。器面は、頸部に刷毛目痕、胴部にはヘラ状工具による整形痕を認める。

5は、深鉢形を示す。口径27cm、胴径26cmを測る。形態は復元されているが、外反する



第11図　星久喜遺跡出土土器(1)・（¼）（柿沼・1973）

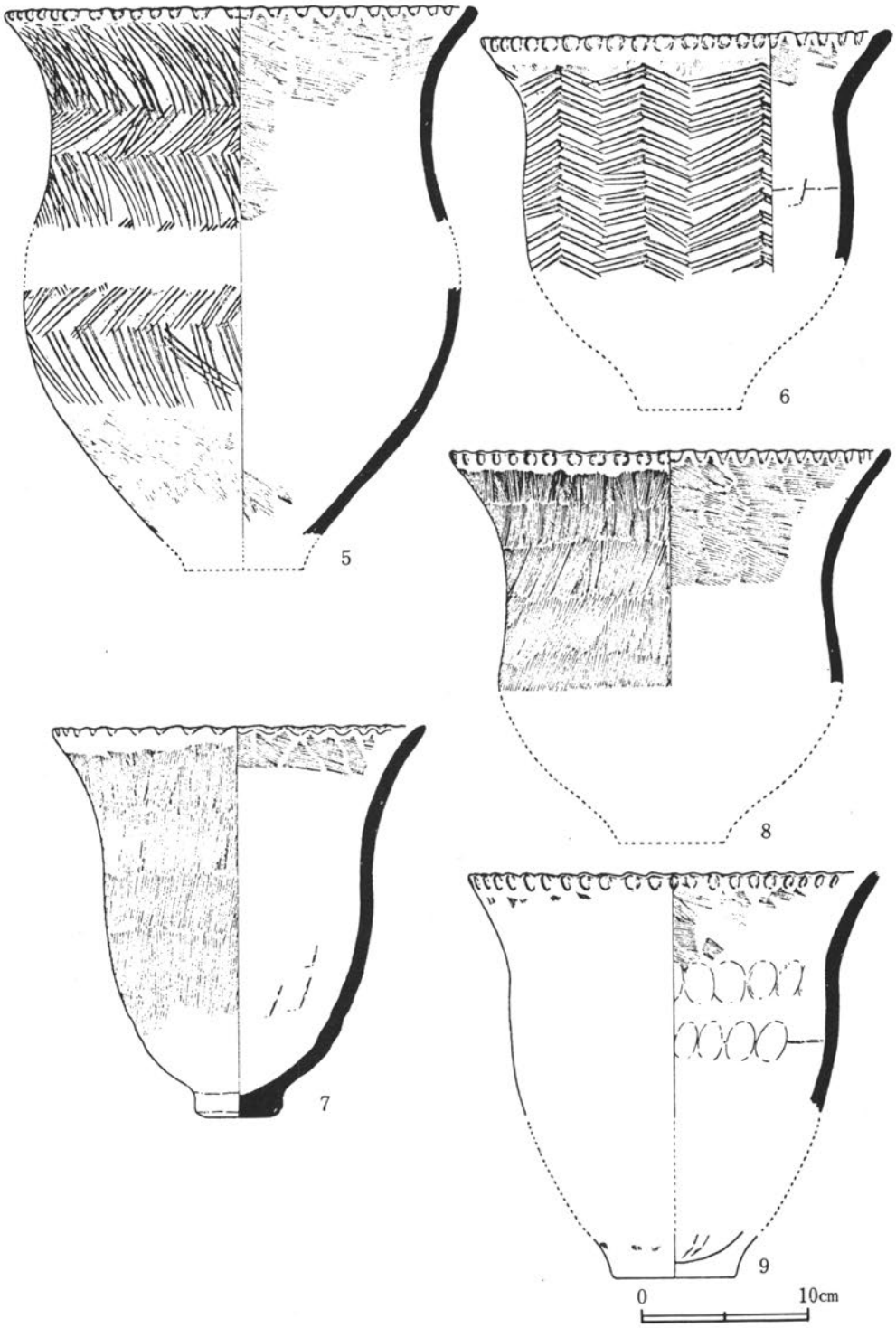
口縁部と、ほぼ球状の胴部をもつ。口唇部は、押捺を施し、波状を呈す。内外器面とも刷毛目調整を施してのち、口縁部から胴部にかけて、3本単位の櫛状施文具により、7段(推定を含めて）の羽状条痕が施文されている。

6は、底部を欠損する深鉢形土器。口径24cm、胴径19.5cmを測る。口縁部は外反し、口唇近くで若干肥厚する。胴部は直立に近い。口唇部は指頭により押捺圧痕を施し、器面一様に刷毛目調整を行なっている。器面には、3本単位の櫛状施文具により羽状条痕文が縦走して施文されている。

7は、ほぼ完形の深鉢形土器。器高23cm、口径22cm、底径5cmを測る。器形は、ゆるく外反する口縁部とわずかに脹らむ胴部を有する。口唇上は押捺されており、その直下に無文部を残し、他の器面には、刷毛目調整が一様に施されている。

8は、口径26cmを測る深鉢形土器。口唇部は指頭により交互に押捺されている。器面には刷毛目調整を施している。

9は、口径24cmを測る深鉢形土器。口唇上は指頭により交互に押捺されているので、若



第12図　星久喜遺跡出土土器(2)・（¼）（柿沼・1973）

干波状を呈する。器面には、刷毛目調整の痕跡を部分的に認める。内器面にも横位の刷毛目調整を認め、また、その下面には指頭による圧痕が確認される。

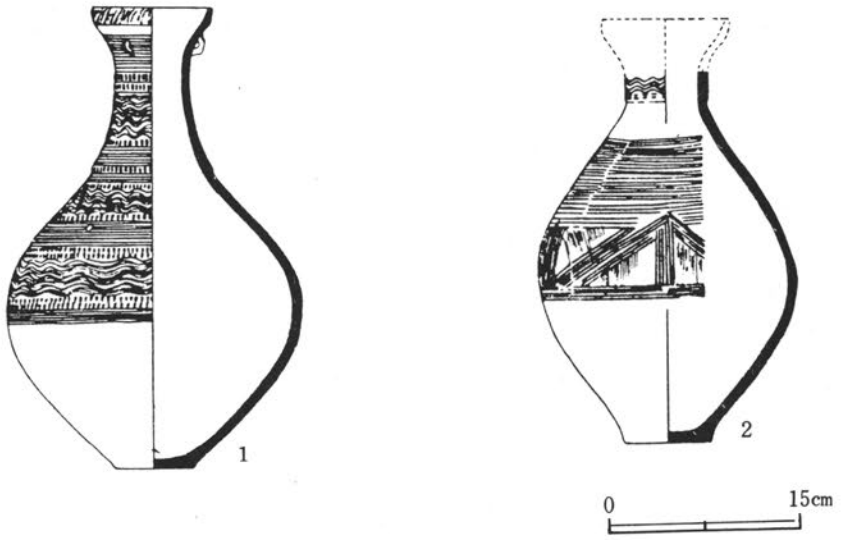
中野台遺跡（第13図）

千葉市千葉寺町字中野台に在る。

この地域は、海岸線にほぼ平行して、旧汀線の海蝕面が直線状に延びている。遺跡はこの地点より、約350 m奥まった所に位置する。標高22 mを測り、樹枝状に開析された小支谷が湾入しており、西方下の水田面との比高は12 mである。台地は、東方より突き出て舌状を呈し、その基部で頸れているため、遺跡は東西150 m、南北230 mの範囲である。昭和36年発掘され、その際、壺形土器2個体が出土した。遺構らしきものは確認されなかったが、その出土状態より、弥生時代の再葬墓と思われる。

1は、長頸の壺形土器。器高38.6cm、口径10cm、頸径6.3 cm、胴径24.7cm、底径6.5 cmを測る。器形は、口縁部がやや内湾しながら広がり、外面に小さな耳状突起が付されている。頸部から肩部にかけて裾が広がる様に移行している。胴部は球状を呈し、最大径が胴中央部に位置する。施文は、平行沈線文とヘラ状工具による刺突文、波状沈線文を交互に配している。

2は、長胴の形態をもつ壺形土器。現器高28.8cm、頸径6.5cm、胴径20cm、底径6.8cmを測る。頸部はほぼ垂直にたちあがり、肩部から胴部に移行する。頸部は若干肥厚し、波状沈線文を施している。肩部には平行沈線文を周回させ、胴部には山形状沈線を施文している。



第13図　中野台遺跡出土土器（1/6）（杉原他・1968）

大森第2遺跡（第14・15図）

千葉市大森町222他に在る。

海岸部から湾入する支谷は、大厳寺町と赤井町に挟まれた地点で三方向に開析する。一つは北東方向の花輪町に、また、一つは北方の仁戸名町方向に、もう一つは北西方向の大森町に向かって支谷が発達している。遺跡はこの北西方向に向かう支谷の北側の台地に位置する。標高は約20mを測る。

調査では、90軒を数える住居址群と、用途不明の土壙、貝ブロックなどが確認された。弥生時代の遺構は、住居址11軒を数える。

1は、壺形土器で、器高31.6cm、口径6.4cm、胴径22.1cm、底径7cmを測る。口縁部はわずかに外反し、頸部は短く、裾が広がるように、長い肩部を有する。胴部中位で、「く」の字形に近い状態で張る。口唇上に縄文が付され、頸部に一条の沈線を周回させ、その下部に2条の波状沈線文を施す。肩部から胴部にかけて、沈線による擬流水文を施文し、横方向に5単位、縦方向に9単位を配す。

2は、壺形土器で、器高32cm、口径9cm、胴径21.8cm、底径7cmを測る。口縁部は若干外反し、胴部は球状を呈す。施文は器面一様に短い単位の刷毛目調整を施しており、口縁部内面には、縄文帯が施文されている。

3は、胴部のみ遺存する壺形土器。胴径24.9cmを測る。文様は、波状沈線文と羽状縄文を認める。羽状縄文帯は沈線にて区画されている。

4は、胴中央部がやや張る形態の壺形土器。胴径29.2cm、底径7.6cmを測る。器面には、刷毛目調整を施している。

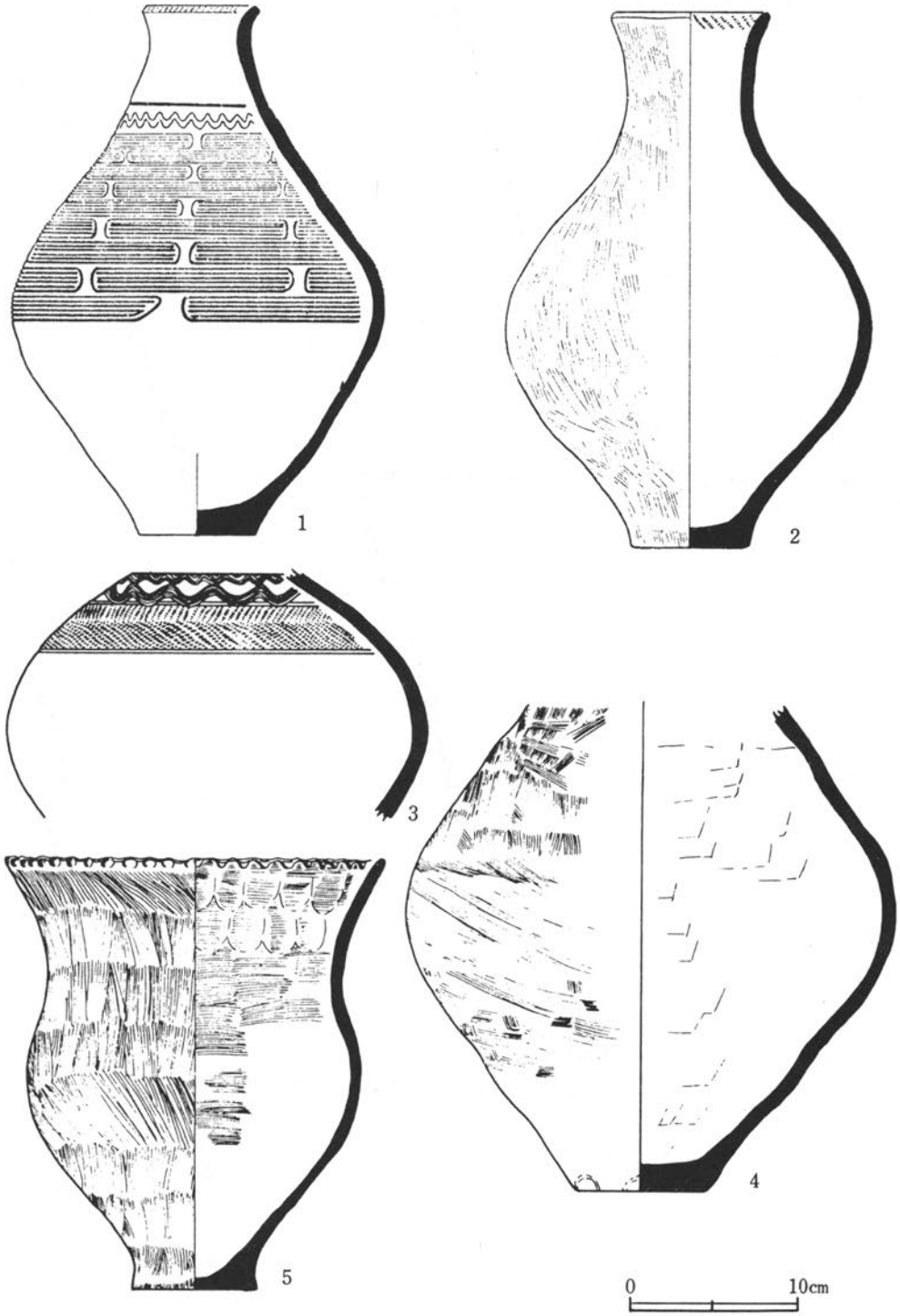
5は、器高25.8cm、口径22cm、胴径20cm、底径7.2cmを測る深鉢形土器。口縁部は外反し、頸部で頸れてから、胴部は球状を示す。底部の端部は、垂直に立ち上る状態である。口唇部には、交互に指頭による押捺圧痕文を施し、器面は刷毛目調整が数段にわたり施文されている。なお、内器面は横位に施す。

6は、器高28cm、口径28.2cm、底径6.4cmを測る深鉢形土器。口縁部は、折り返され、若干肥厚する。器形は、逆円錐状に近く、胴下半部で丸味を持ちながら底部に至る。器面はわずかに刷毛目痕を認めるが、ほとんど調整されている。

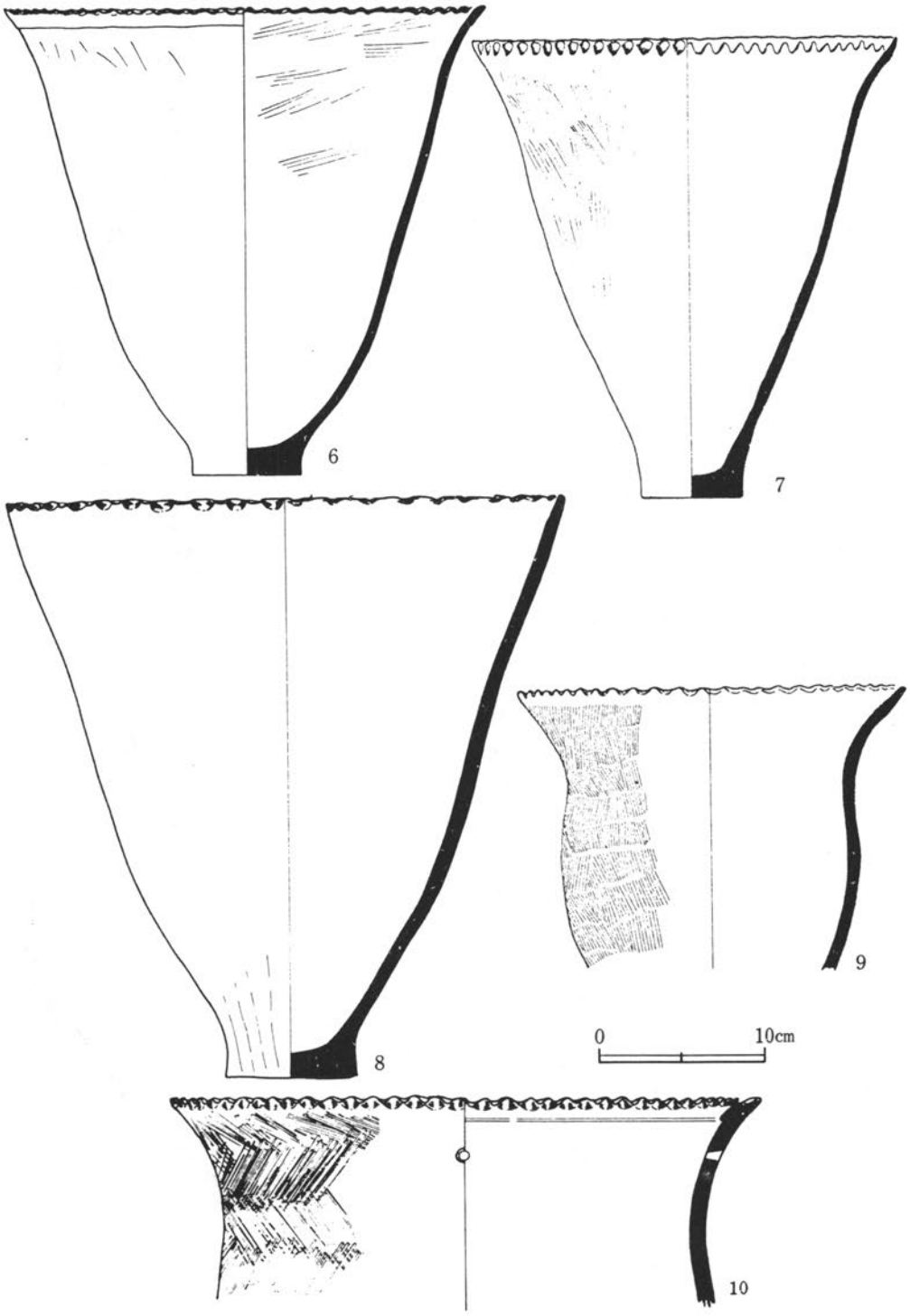
7は、器高27.4cm、口径25.2cm、底径6cmを測る。口縁部は若干外反し、口唇部は尖る。胴部は脹らみをもたずに底部に移行する。口縁部は指頭により押捺されている。器面はヘラ状工具により調整されている。

8は、器高34.7cm、口径33cm、底径7.8cmを測る深鉢形土器。胴下半部に若干脹らみをもつほか、ほぼ直線的に外反する。口縁部に押捺圧痕を認めるほかは、無文である。

9は、口径22.6cmを測る深鉢形土器。頸部で一度頸れ、口縁部はかなり外反する器形である。口縁部上端に指頭により押捺圧痕を施している。器面には刷毛目痕を認める。



第14図　大森第２遺跡出土土器(1)・（1/4）（栗本他・1973）



第15図　大森第２遺跡出土土器(2)・（1/4）（栗本他・1973）

10は、口径35cmを測る深鉢形土器。口縁部は内側に折り返され、肥厚して稜をもつ。口縁部上端は圧痕が施され、波状を示す。器面には横走羽状条痕文が施されている。

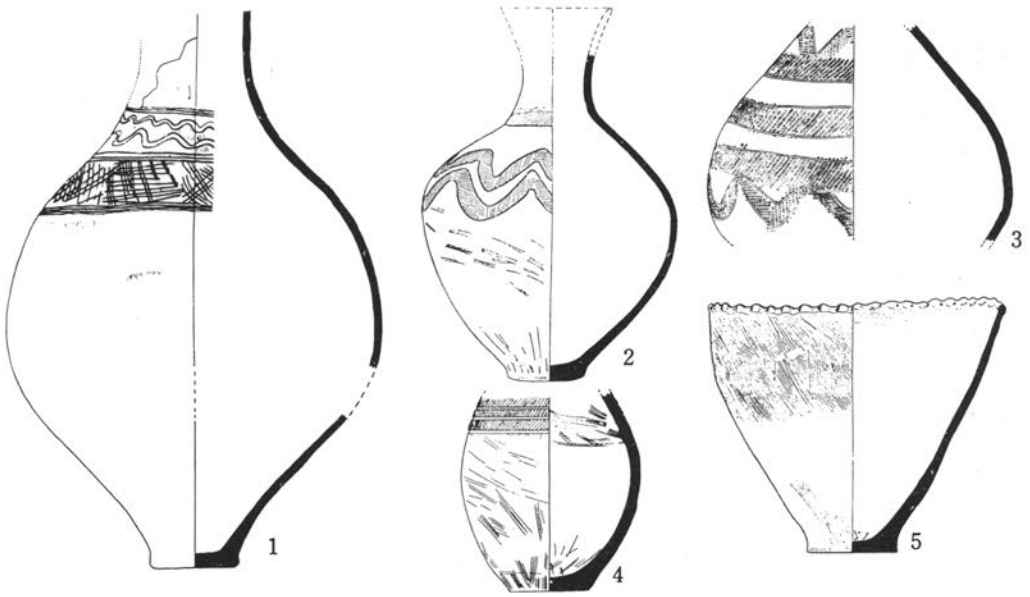
平蔵台遺跡（第16図1）

遺跡は、東金市松之郷字金谷に在る。

付近の地形は、旧汀線の海蝕面が直線状に北上しており、いわゆる下総台地と九十九里沖積地を明瞭に分割している。その比高差は40～50mあり、急峻な崖面を形成している。遺跡はその海蝕面に接した台地上に位置する。

調査により、弥生期の住居址4軒、古墳期の住居址2軒を検出している。

1は、大形の壺形土器。肩部が張り、最大径を胴下半部に有する。施文は肩部に認められ、櫛状工具により、平行沈線文、波状沈線文、斜行沈線文が施文されている。



第16図　平蔵台遺跡(1)・若宮（2～5）出土土器（不同）（丸子・1971，市毛他・1967）

若宮遺跡（第16図）

市原市山木若宮に在る。

遺跡は、東京湾に面した台地上に位置し、標高25m、西方の沖積地との比高は18m前後を測る。占地する台地は、幅150m、長さ約200mの規模で舌状に突き出ており、その平坦面上を遺跡範囲とする。調査は部分的なものなので全体をとらえられないが、弥生時代宮ノ台期住居址2軒、久ケ原期住居址1軒、古墳～歴史時代の住居址16軒を確認した。

2は、S－7号住居址出土の壺形土器。最大径を胴上部にもち、肩部が若干張る形状で

ある。部分的に刷毛目痕を認めるところから、器面一様に刷毛目調整が施されていたものと思われる。頸部下半に縄文帯を施し、沈線で区画する。胴上半部には、2段にわたり羽状に縄文帯を設け、沈線で区画している。

3は、E－18号住居址出土の壺形土器。胴下半部に最大径を有する下脹れの器形をもつ。施文原体L・Rを用いた縄文帯を肩部に施文する。文様構成は、上から山形縄文帯、3段の斜行縄文帯、そして波状縄文帯とし、各々沈線にて区画している。

4は、E－16号住居址出土の壺形土器。小形であり、胴部は緩やかな脹らみを持つ。器面は刷毛目調整を認め、肩部には、施文原体L・Rを用いた縄文が施文され、沈線で区画されている。

5は、E－16号住居址出土の浅鉢形土器。いわゆる煮沸形態の深鉢形土器を小形化した器形である。器面には刷毛目調整を施し、口縁部上端は、指頭による押捺圧痕を認める。

市原市惣社出土遺物（第10図3）

器高35.5cm、口径11.6cm、頸径7.3cm、胴径22.8cm、底径8.3cm、器厚0.9cmを測る。器形は、球状の胴部と、外反する口縁部に注目される。外面は、頸部下より胴部にかけて、施文原体L・Rを用いた縄文を横位に押捺し、沈線により区画している。なお、区画による縄文帯は、横位に5単位である。施文順をとらえると、整形→全面刷毛目調整→肩部及び口唇部縄文施文→縄文帯沈線区画である。口縁部内面には刷毛目調整ののち、ヘラ磨きを施している。色調は明褐色で、胎土内には砂粒を多く含み、焼成は良好である。

菊間遺跡（第17図～第20図）

遺跡は、市原市菊間字北野に在る。

占地する台地は、北方を村田川、南方を養老川によって分断された、南北幅6.5kmの市原台地である。遺跡はその北方端に位置する。標高は20m　北方の村田川沖積地面との比高は約15mである。

検出された遺構は、弥生期住居址49軒、古墳期住居址6軒、弥生期方形周溝墓3基、円形周溝2基、溝状遺構7基（このうち1基はV字溝）を数える。

出土土器のうち、主なものを掲図した。

1は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。頸径5.6cm、胴径22.8cm、器厚0.9cmを測る。器形は、細い頸部から裾を広げるように胴部に移行する。最大径は胴部のほぼ中央である。地文として、肩部上位と胴部に施文原体Lの無節の縄文を横方向に施文している。頸部には平行沈線とヘラ状工具による刺突文を配する。肩部及び胴部へは、3本を1単位とする沈線文を施す。なお、上段は小波状を、下段は直線を呈す。さらに、各文様帯を区画するように、横位の刺突文を加えている。胴下半部を除き、全面赤彩されている。

2は、口縁部を欠く壺形土器。胴径19.3cm、底径7cmを測る。器形は、最大径を胴上部にもち、肩部が張る。器面には、刷毛目調整を認め、肩部に2本単位、2段の波状沈線を周回させている。

3は、口縁部を欠く壺形土器。胴径17cm、底径4.4cmを測る。器形は下脹れである。地文としては、刷毛目調整を施しており、その上面を一様にヘラナデしている。肩部へ羽状縄文と、「ハ」の字の縄文帯を2段配し、沈線で区画している。

4は、口縁部と底部を欠く壺形土器。最大径を胴下半部に有し、18.7cmを測る。器形は、頸部が裾を広げるように胴部へと移行し、下脹れとなる。器面には地文として、刷毛目調整を施し、肩部に2段にわたり縄文帯を施文する。その上面に3段にわたり波状沈線を配している。

5は、胴部が球状を呈する壺形土器。頸径7cm、胴径24.1cmを測る。最大径を胴中央部にもち、安定した器形である。施文は肩部に認められ、施文原体R・Lを用いた縄文を、上半部に1条、下半部に2条施文している。また、「ハ」の字形の沈線間を充填するように、右上と真下方向に施文している。

6は、口縁部と底部を欠損する壺形土器。頸径6cm、胴径23.8cmを測る。器形は、細頸で、最大径を胴下半にもつ下脹れの土器である。施文は、刷毛目調整を施した上にヘラ磨きが認められる。肩部に羽状縄文と「ハ」の字縄文帯を施文、各文様帯を沈線で区画してから、頸部を縦位にヘラ磨きする。また、文様帯以外の無文部は赤彩されている。

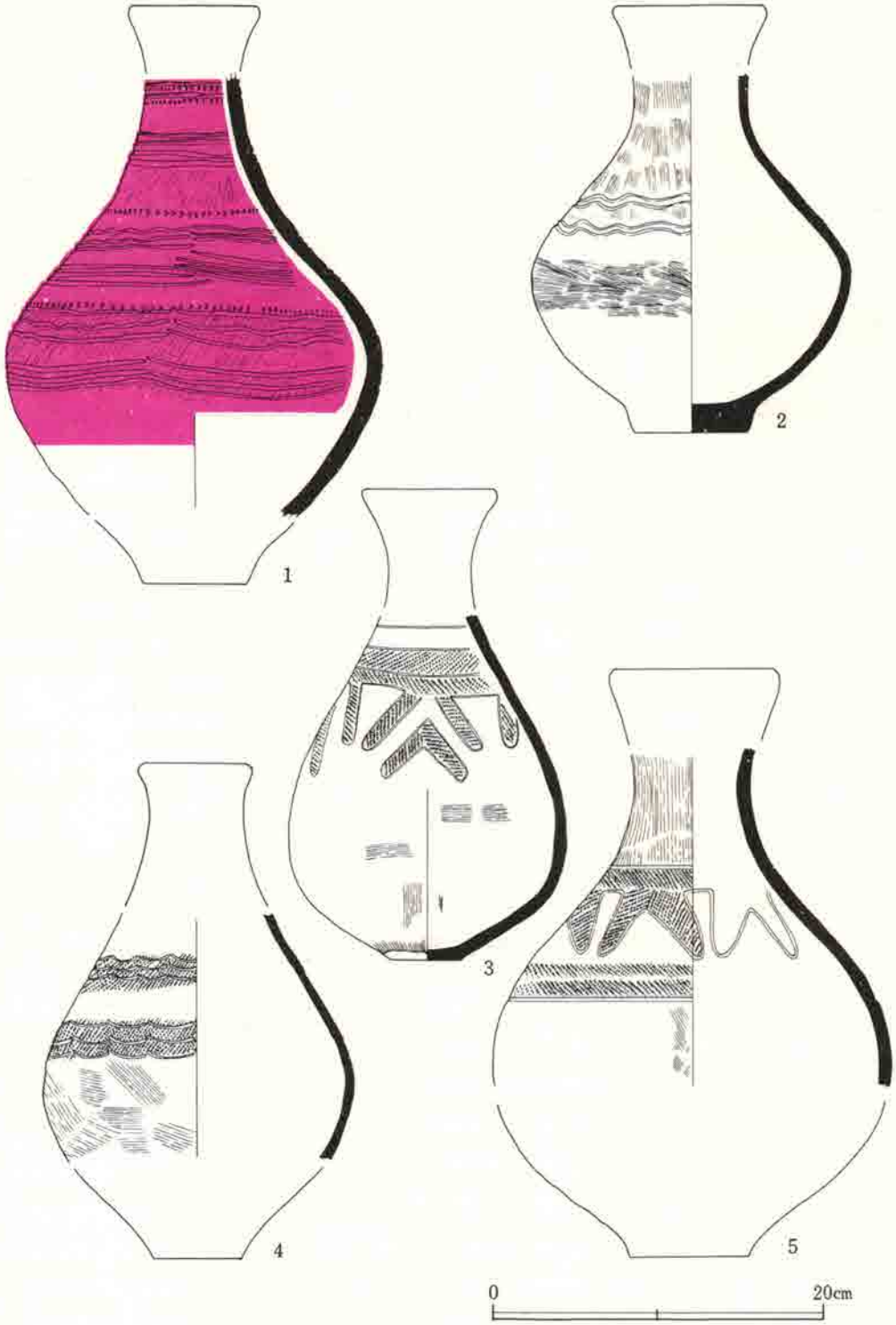
7は、口縁部を欠損する壺形土器。胴径20.3cmを測る。最大径を胴部中央か、やや上部にもつ器形である。器面は一様に刷毛目調整を施してのち、ヘラ磨きを行った模様。肩部に3段にわたり、施文原体L・Rを用いた縄文を横方向より施文されている。

8は、わずかに口縁部を欠損する壺形土器。頸径5.7cm、胴径19.9cm、底径5.1cmを測る。器形は、最大径を胴中央部にもち、全体的に菱形を示す。器面全体に刷毛目調整を施してのち、頸部に、施文原体L・Rを用いた縄文帯を周回し、頸部及び胴下半部にヘラナデを行なっている。

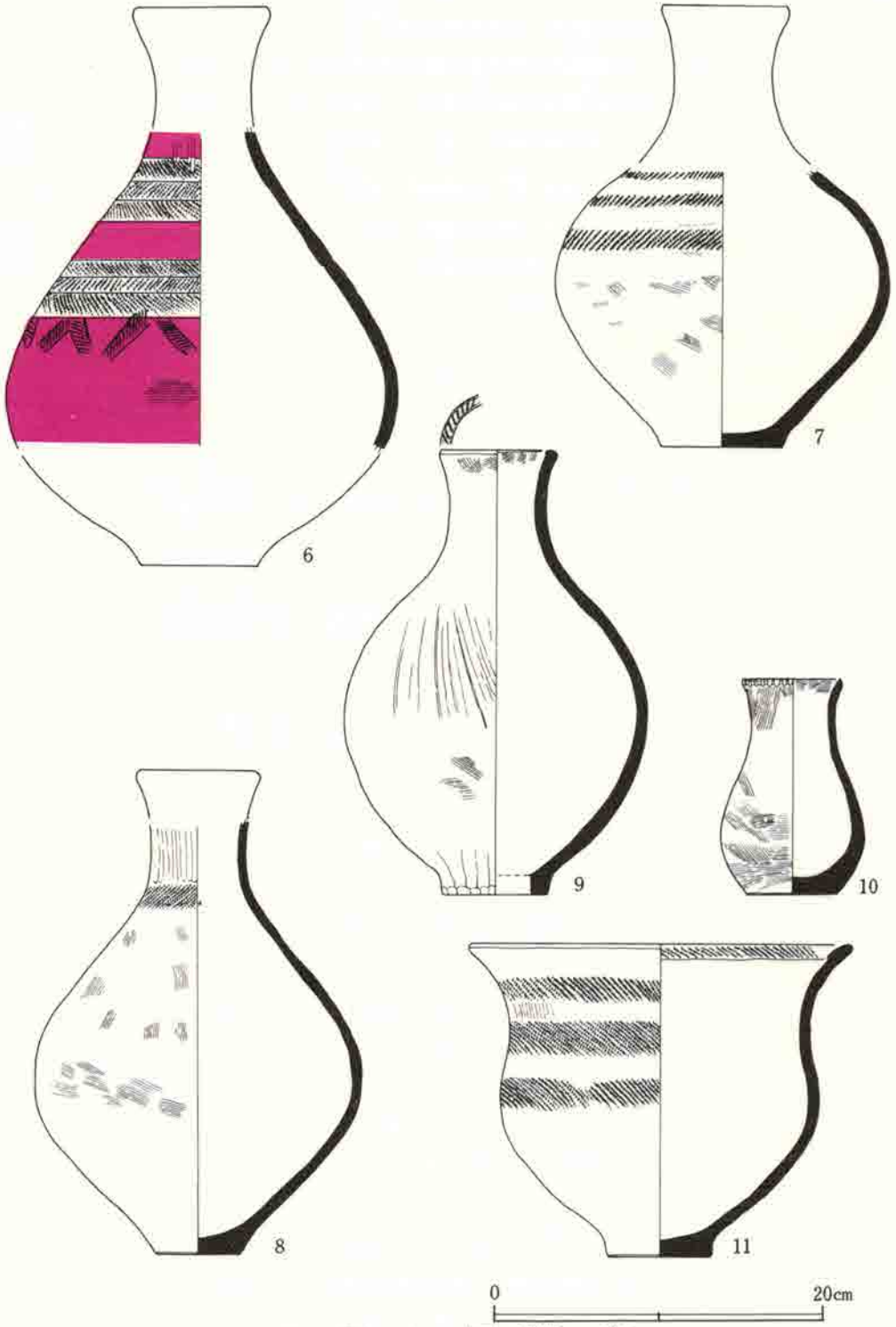
9は、ほぼ完形を示す壺形土器。器高27cm、口径7cm、頸径6cm、胴径18.3cm、底径6.4cmを測る。胴部は球形で、頸部は直立する。口縁部はわずかに外反し口唇上面が平坦にされて内側に稜をもつ。器面には刷毛目調整ののちナデを施し、胴上半部にはヘラ磨きを認める。口唇上には、施文原体R・Lを用いた縄文を施文している。

10は、小形壺形土器。器高13cm、口径6.2cm、胴径8.8cm、底径5.6cmを測る。全面に刷毛目調整を施し、口唇部に刻み目を付している。

11は、器高19.2cm、口径23cm、底径6.4cmを測る鉢形土器。口縁部は折り返し口縁で内側に稜をもつ。かなり外反する器形であるが、頸部から胴部への移行はスムーズである。頸部及び胴部、口縁内面には、施文原体R・Lを用いた縄文帯を施文している。



第17図　菊間遺跡出土の壺形土器(1)・（¾）



第18図　菊間遺跡出土の壺形土器(2)・（1/4）

12は、底部を欠損する深鉢形土器。推定器高30cm、口径27.5cm、胴径20.5cmを測る。器形は、口縁部が直線状に外反し、頸部は直立して胴部へ移行する。口唇外面には、櫛状工具による刻目文を施している。器面には、一様に刷毛目調整を行ない、その上面に櫛状工具により羽状条痕を施文している。口唇内面には、平行鎖線文を認める。

13は、約⅓を欠損する深鉢形土器。口径20.6cmを測る。口縁部は外反し、胴部は直立に近い。口唇は指頭による押捺圧痕を施す。内外両器面とも刷毛目調整を施し、外器面には、3段にわたり羽状条痕を施文している。

14は、口径19cmを測る深鉢形土器。胴部は弧状に脹らみ、最大径が口径に近い。口唇は指頭により押捺圧痕を施し、波状を呈す。器面は、刷毛目調整を一様に施している。内面には横位に認める。

15は、底部を欠く深鉢形土器。口径18.4cmを測る。胴部は球状に脹らみ、口縁は外反する。器壁には、ヘラを用いたナデ及び磨きを施してのち、3段にわたり羽状条痕を施文する。

16は、ほぼ完形の深鉢形土器。器高16.8cm、口径19cm、底径5.7cmを測る。器面への施文は、胴部への斜行刷毛目調整、縦位の刷毛目調整、口唇及び胴部への横位の刷毛目調整、口唇への弱い圧痕文の順で施文している。

17は、完形の深鉢形土器。器高18.1cm、口径21.4cmを測る。器壁は、胴部がわずかに脹らむが全体的に外反する。口唇上には、指頭による押捺圧痕を施し、波状を示す。器面には、粗い刷毛目調整を施している。

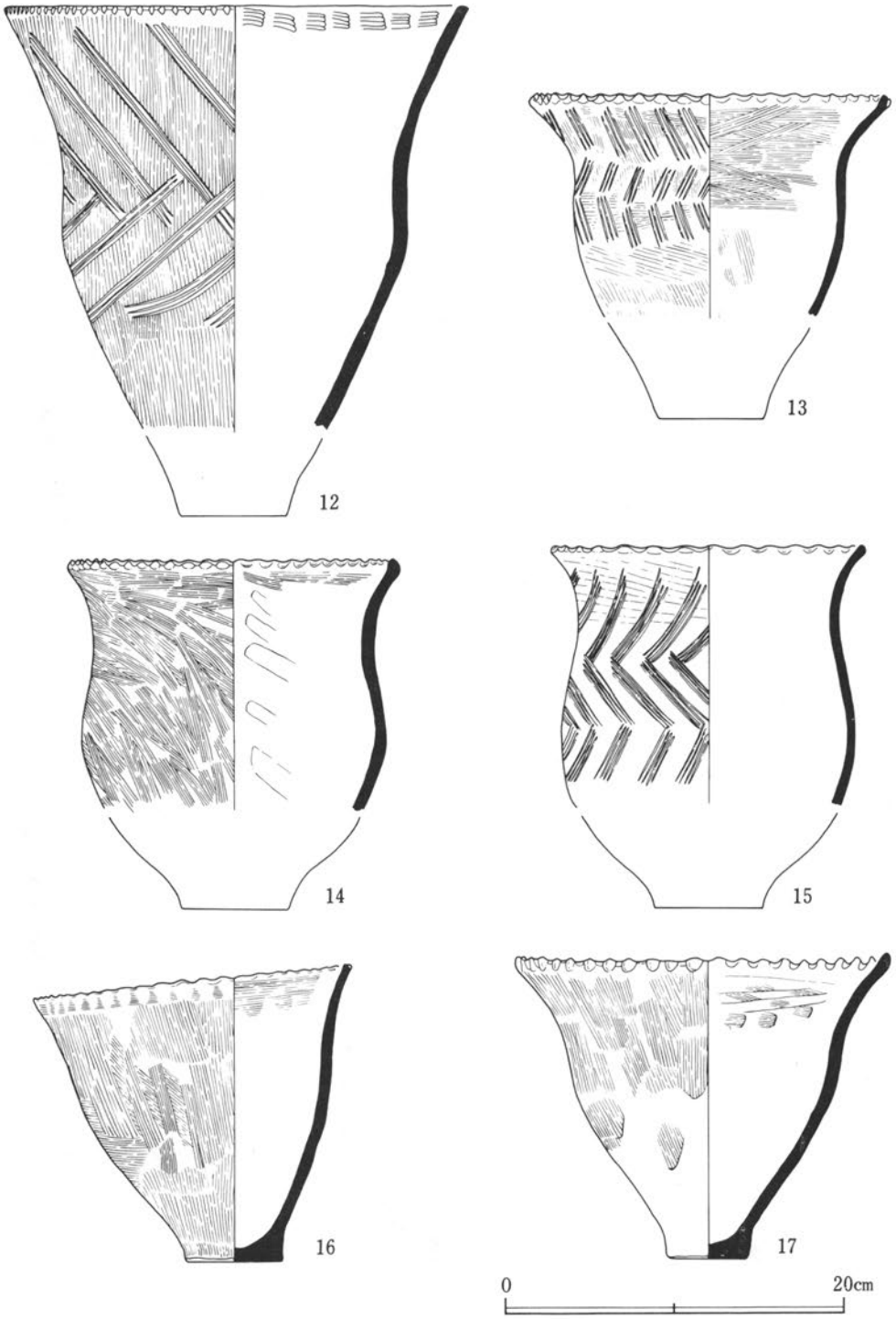
18は、底部を欠損する深鉢形土器。口径33cm、胴径29.2cmを測る。口縁部は短く外反し、頸部から胴部にかけては直立に近い。口唇上には、交互に指頭圧痕文を施し、波状を示している。器面には、6本単位と思われる施文具を用い、刷毛目調整を行なっている。

19は、ほぼ完形の深鉢形土器。器高20.7cm、口径18.4cm、胴径16cm、底径6cmを測る。最大径を胴上部に有し、口縁は外反する。口唇外面には櫛状工具による刻み目を付し、器面には、ほぼ縦位に刷毛目調整を施している。また、口縁部内面には横位に認める。底部は、中央が凹み、高台状を示す。

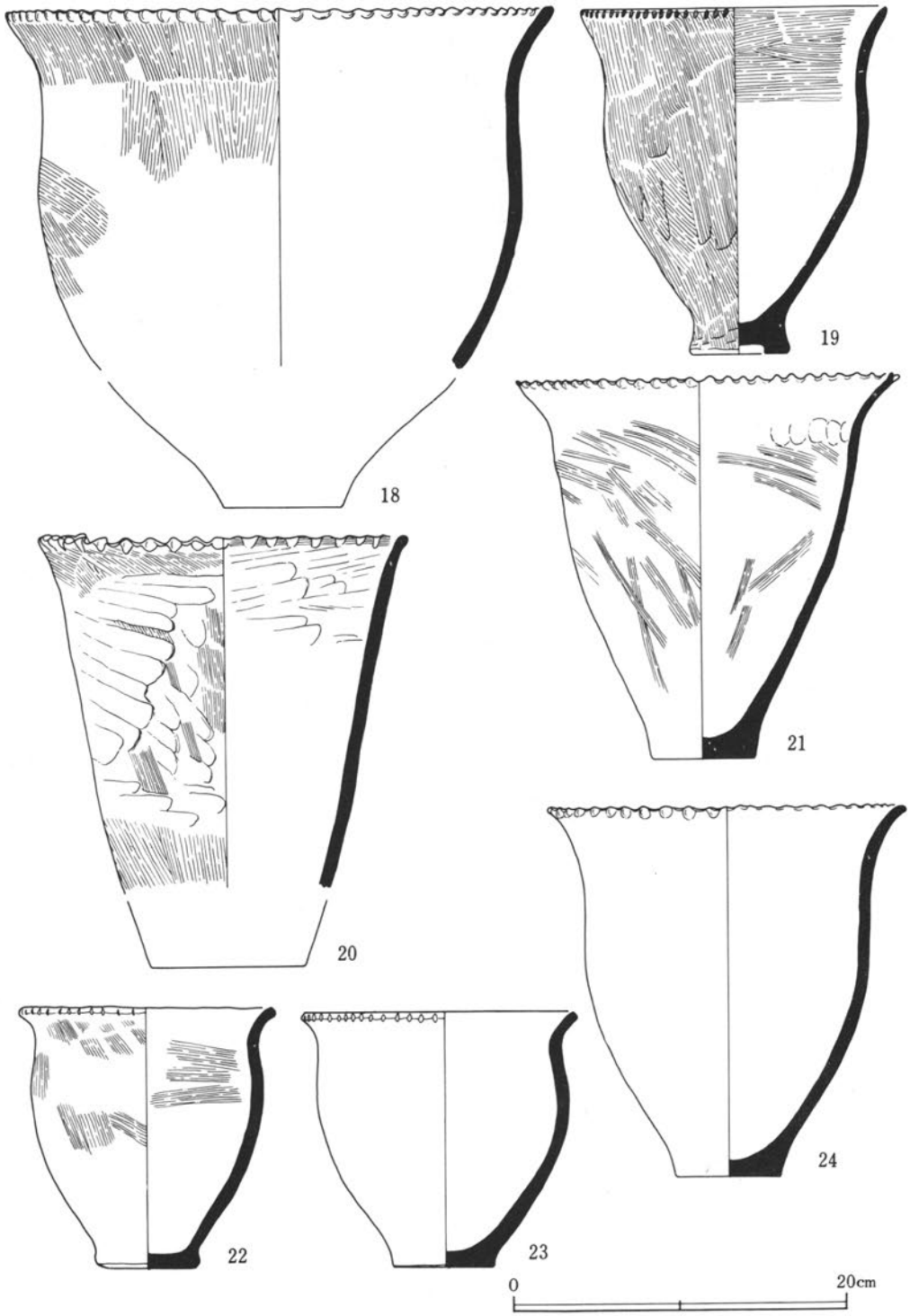
20は、口径21cmを測る深鉢形土器。器形は、口唇がわずかに外反するほかは、直線状に胴下半部に移行する。口唇部はかなり強く指頭による押捺圧痕を施している。器面には、刷毛目調整を施してのち、ヘラで粗いナデ（一部はケズリ状を示す）を行なっている。

21は、完形に近い深鉢形土器。器高22.8cm、口径23cm、底径6.2cmを測る。器壁は薄く、口縁部は「く」の字形に外反し、胴部は直線状に移行する。口唇上は指頭による押捺圧痕を施している。器面は、刷毛目調整を部分的に認める。頸部内面には、指頭による圧痕を確認する。

22は、完形の深鉢形土器。器高15.8cm、口径15.5cm、底径6.3cmを測る。口縁部は短く



第19図　菊間遺跡出土の深鉢形土器(1)・（1/4）



第20図　菊間遺跡出土の深鉢形土器(2)・（1/4）

外反し、頸部から胴部にかけてわずかに脹らみながら移行する。口唇部にはヘラによる刻み目、器面には刷毛目調整を認める。

23は、深鉢形土器。器高15.5cm、口径16cm、底径6cmを測る。頸部で「く」の字形に屈曲し、口唇断面は四角形状である。口縁は平縁で、ヘラによる刻み目を施す。器面は、ヘラによるナデ調整を施している。

24は、上半部約⅔が欠損する深鉢形土器。器高22.3cm、口径21.4cm（推定）、底径6.3cmを測る。口縁部は外反し、頸部は円筒状を示す。口唇上には、指頭による押捺圧痕文を施し、器面は平滑にヘラナデされている。

大廐遺跡

市原市大廐に在る。

遺跡は、村田川とその支流である神崎川の合流地点の西側台地上に位置する。標高は約30mで、村田川沖積地面との比高は20m前後である。立地する台地は、市原台地より延びたもので、神崎川とまたそれに開析された一支谷により囲まれた、南北約430m、東西500mの平坦面上である。

遺構は縄文時代からあるが、弥生時代では、住居址65軒、土壙6基、V字溝2基を確認した。調査範囲は、限られているため、まだ多くの遺構の存在が予測されるが、弥生時代の遺構では、中期後半から後期後半まで比定され、とくに宮ノ台期の遺構が多い。また、後期の遺構群は、宮ノ台期に比定される遺構の集中する地点より、西側の地点に移行する傾向があるという。

出土遺物は多岐にわたるが、住居址より多くの土器が出土している。宮ノ台式土器は壺形土器、広口壺形土器、深鉢形土器が出土している。特に、深鉢形土器の底部に穿孔を施し、甑形土器と用いているものが注意される。また、貯蔵形態の壺形土器と、煮沸形態の深鉢形土器では、個体数において、1対2の比率を示す[27]。

石器は、扁平片刃石斧・鑿形石斧・抉入石斧の出土が多い。

宮ノ台遺跡

茂原市綱島に在る。

南関東弥生中期土器の宮ノ台式土器の標式遺跡である。

遺跡は、第三紀凝灰岩質の丘陵が浸蝕を受け、このため形成された独立丘状の台地の西面に位置している。標高は約20mを測り、緩斜面を経て、一ノ宮川の沖積地面に達する。地下水位が高いため、遺物包含層は泥炭層化している。なおこの付近の地形で特徴的なのは丘陵の南面が開析を受けず直線的であるのに対し北面は樹枝状に細かく開析されていることである。

出土遺物は、土器と石器が見受けられ、土器は、宮ノ台式と久ケ原式土器が、石器では、太形蛤刃石斧・抉入石斧が確認される。

船子遺跡（第21・22図）

本遺跡は、夷隅郡大多喜町大字船子、県立大多喜女子高等学校内に在る。

遺跡は大多喜町の東に位置し、東西を水田に囲まれた、北方に突きでる舌状台地で、その規模は幅220 m、長さ850 mを測る。なお、標高は約40m、水田面との比高は、約15mを示す。夷隅川は、遺跡の立地する台地を西方から、北また東方にかけて流下する。特に台地北方端は夷隅川に接し、浸蝕されている模様である。南方は、標高80m前後を測る丘陵が連なっている。

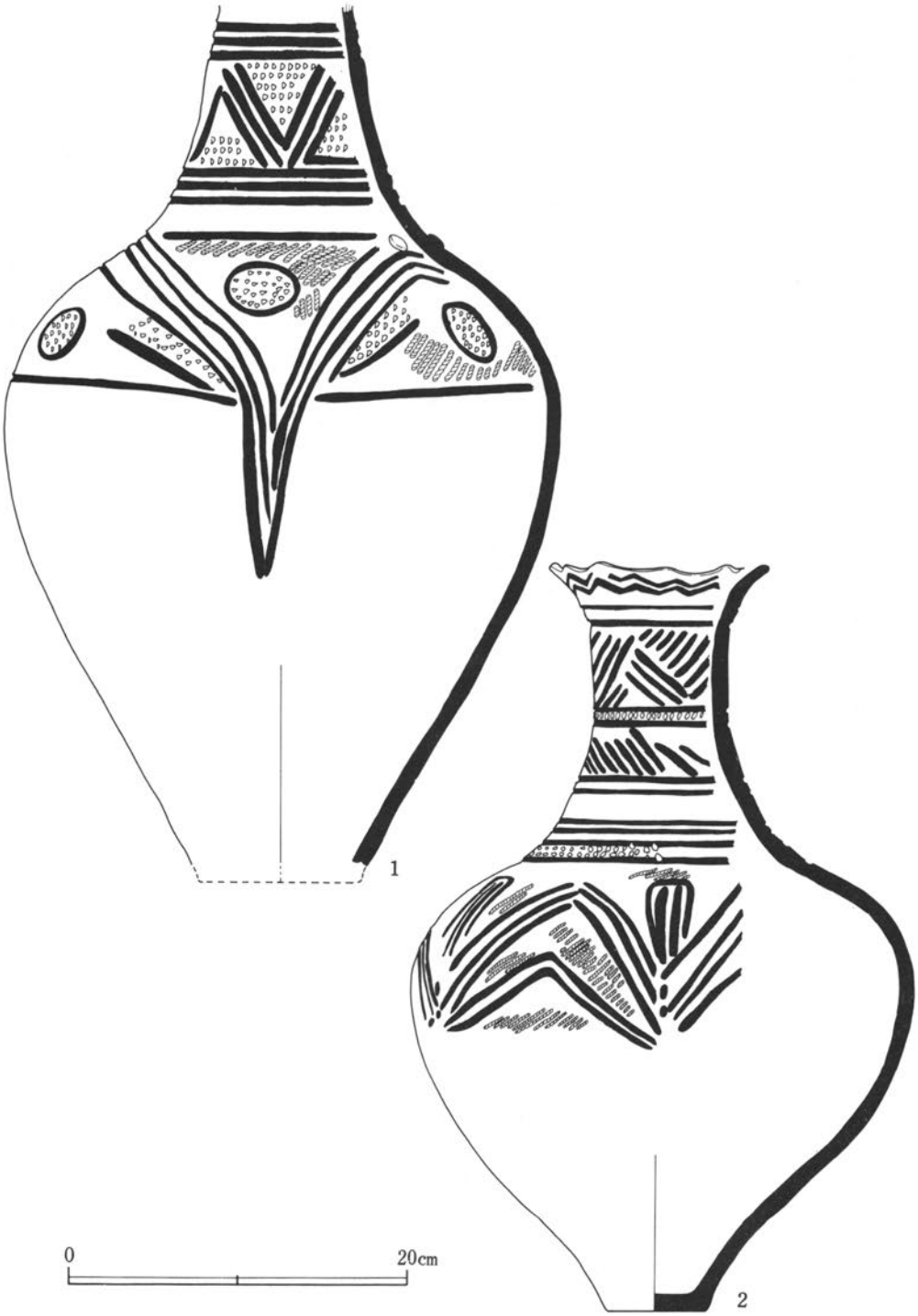
1968年7月、大多喜女子高等学校の清明寮前の土取り作業中に、深さ30cmから、弥生式土器が4個体発見された。その出土状態は、約5 mの範囲に石が散在しており、その上面に、若干横臥した状態だったという。また、土器のまわりを石で囲んでいたということである。

1は、口縁部と底部を欠損する大形壺形土器で、現器高51cm、頸径9 cm、胴径32.6cm、器厚0.8 cmを測る。器形は肩部が張らみ、最大径を胴上部に有する。頸部はかなり細くなる。文様構成は、縄文と沈線文、刺突文による。文様は肩部より頸部に認め、各文様帯を沈線文により区画している。頸部は上下3本の沈線を周回し、重三角形文を配し、その内側はヘラによる刺突を加えている。肩部の地文は、施文原体R・Lを用いた縄文と思われ、縦方向に施文されている。その上面には、太描きの円形沈線、肩部から胴部に斜めに垂下する4条の沈線を配し、円形沈線の内側及び条線の一部に、ヘラによる刺突による充填文を施している。胴下部は磨耗していて不明瞭であるが、一部擦痕を認める。胎土は長石、砂粒を多量に含み、色調は淡褐色である。焼成は普通である。

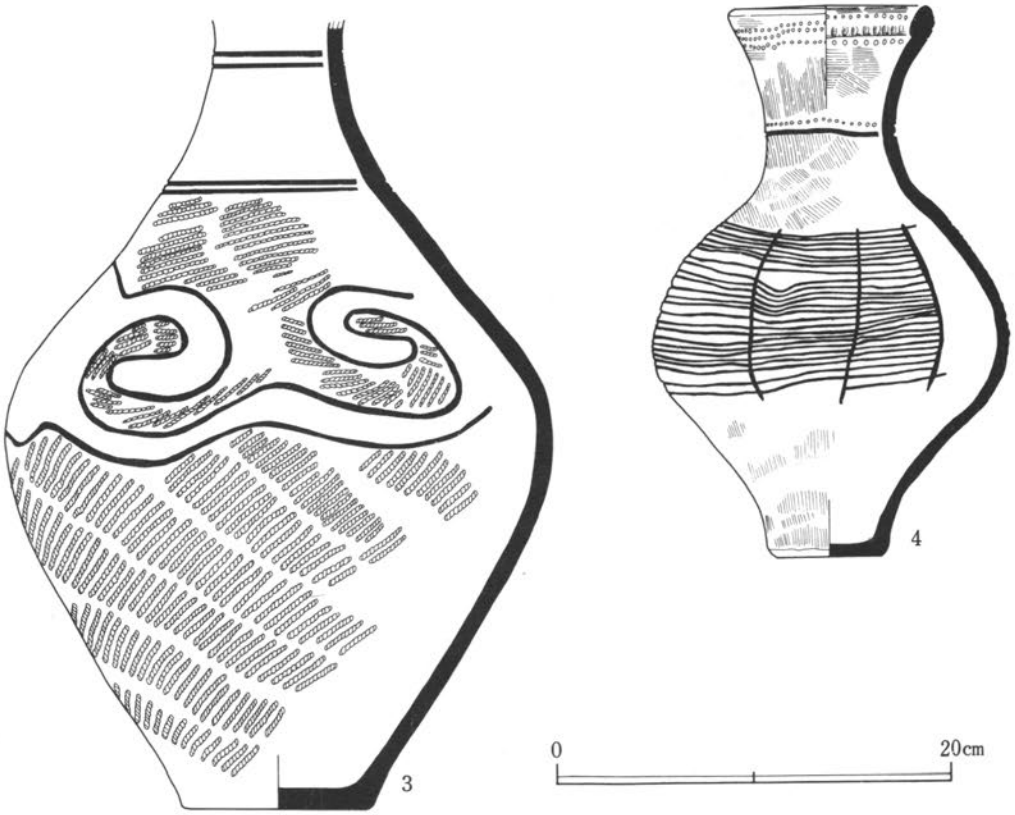
2は、完形の大形壺形土器である。器高44cm、口径12.3cm、胴径29.8cm、底径5.8 cm、器厚0.8 cmを測る。口縁が10単位（推定）の小波状を呈し、ラッパ状に開口し、頸部の横位の沈線部で屈曲する。胴部は、上位部が張らみ、球状のまま底部に移行する。口縁から頸部下半まで沈線と刺突文による文様構成をもつ。上から波状沈線2条、横位沈線2条、斜行沈線数単位、横位沈線2条、その間の稜部に刺突文、斜行沈線数単位、横位沈線2条、横位沈線4条、下部に刺突文が施されている。肩部から胴部にかけて、節は不明瞭であるが、地文として縄文と思われるものが施され、また、山形に配する太描き沈線を加え、各文様単位間は、列点状の沈線を施している。胎土は砂粒を若干含み、焼成は不良、色調は黒褐色を呈する。

3は、口縁を欠損する壺形土器で、現高39.8cm、頸径6.5 cm、胴径27.6cm、底径9.3 cm、器厚0.8 cmを測る。器壁は大きく「く」の字形を呈す。頸部には、2単位に2条の沈線が周回している。肩部から底部にかけては、一様に施文原体Rと思われる無節の縄文を横位に施文している。2本の沈線による渦文を配し、その内側を磨消している。胎土には砂粒を含み、色調は褐色、焼成は普通である。

1、2は須和田式土器の範疇に入り、3は野沢Ⅱ式土器に類すると思われる。



第21図　船子遺跡出土土器（1/4）



第22図　船子遺跡(3)・八重原(4)出土土器（1/4）

君津市八重原出土遺物（第22図4）

遺跡は君津市八重原に在る。

立地する地域は　下総台地に比べ、かなりの標高をもつ丘陵が連なる。遺跡の標高は30～35mを測り、背景に標高100 m以上の丘陵をひかえ、一方、南には、標高10～15mを測る小糸川沖積地を望む。付近の地形は、小糸川の影響をかなり強く受けており、旧河川の河跡が微地形となって残っている。

各計測値は、器高27.5cm、口径9.5cm、胴径18cm、底径6.2cm、器厚0.7cmを示す。口縁部は、複合口縁であり、胴部が張り出し、その直下ですぼまり、突き出た底部を形作る。外器面は、一様に刷毛目調整が施され、口縁部は横位に、他の部位はほぼ縦位に行なわれている。口縁部と頸部には、それぞれ3条の円形刺突、1条の円形刺突と横位沈線が施文されている。口縁部内面は、複合口縁の稜部があり、器面一様に刷毛目調整を施している。その上面に、列点状に円形刺突、また、ヘラ状工具による刻み目文を施文している。胴部には、径5cm前後の竹管を半截した施文具を用いて、数条の横位の沈線を周回施文してい

る。なお、沈線をほぼ等間隔に、縦方向に8単位垂下施文している。胎土は砂粒を含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。

註

1　ここで表示した西暦年は、佐原、真、金関　恕「米と金属の世紀」『稲作の始まり　弥生時代1』古代史発掘4　1975　を参考とし、弥生時代を前200年から300年までの500年間とした。

2　三森俊彦・阪田正一他『市原市大厩遺跡』千葉県都市公社　1974

3　斎木　勝・種田斉吾他『市原市菊間遺跡』千葉県都市公社　1974

4　註2に同じ

5　田中義昭「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」考古学研究第22巻第3号　1976

6　須和田期の住居址は伊豆諸島利島で確認されている（大塚初重「利島ケッケイ山遺跡の調査」伊豆諸島文化財綜合調査報告（第2分冊）1959)。

形状は隅丸方形で東西5.2 m　南北5 mを測る。壁は傾斜しており、内部施設として、中央部より南に偏在する炉、4本の円形垂直な柱穴がある。

7　菊間遺跡第35号住居址など。

8　杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部考古学研究室　1974

9　杉原荘介「下総新田山遺跡調査概報」人類学雑誌第58巻第7号　1943

10　「中野台出土の弥生式土器」『千葉市の文化財』千葉市教育委員会　1961

11　渡辺正吾「大多喜町船子遺跡の新事例について」総南文化第12号　1970

12　森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究」千葉大学教養部研究報告A－5　1972

13　註8に同じ。

14　柿沼修平「星久喜遺跡」『京葉』千葉県都市公社　1973

15　註3に同じ。

16　斎藤吉弘「南総中遺跡発掘調査概報」先史第8号　1972

17　杉原荘介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」考古学集刊第3巻第3号　1967

18　杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報」考古学第6巻第7号　1935　杉原荘介「上総宮ノ台遺跡調査概報－補遺－」古代文化第13巻第7号　1942

19　擬似流水文と表記するのを見受けるが、学史的にみるならば、擬流水文という記述である。

20　弥生時代の磨製石斧では、このように太形蛤刃石斧など5種類ある。石器などの生産性のある道具は、使用に際し、人間の動作や労働行為に対して、自分の法則にもとづく、合則的な行動様式に従うことをかならず要求する。すなわち、人間の動作のパターン化である。こうした動作のパターン化は、道具の機能上の合則範囲を一方の極とし、他方では、生産性を一つの極とする。この二つの極のなかで、一つの機能を有する石器の類型が許容されるのである。

21　註2に同じ。

22　註2に同じ。

23　石岡憲雄他『上総菅生遺跡』菅生遺跡調査団　1973

24　註14に同じ。

25　註3に同じ。

26　栗本佳弘他「大森第2遺跡」『京葉』千葉県都市公社　1973

27　同じ水系で、下流域にある菊間遺跡では、壺形土器と深鉢形土器の個体数の比率は、1対1である。この差は、ある程度の生産様式の差ではないだろうか。

第2節　弥　生　後　期　文　化

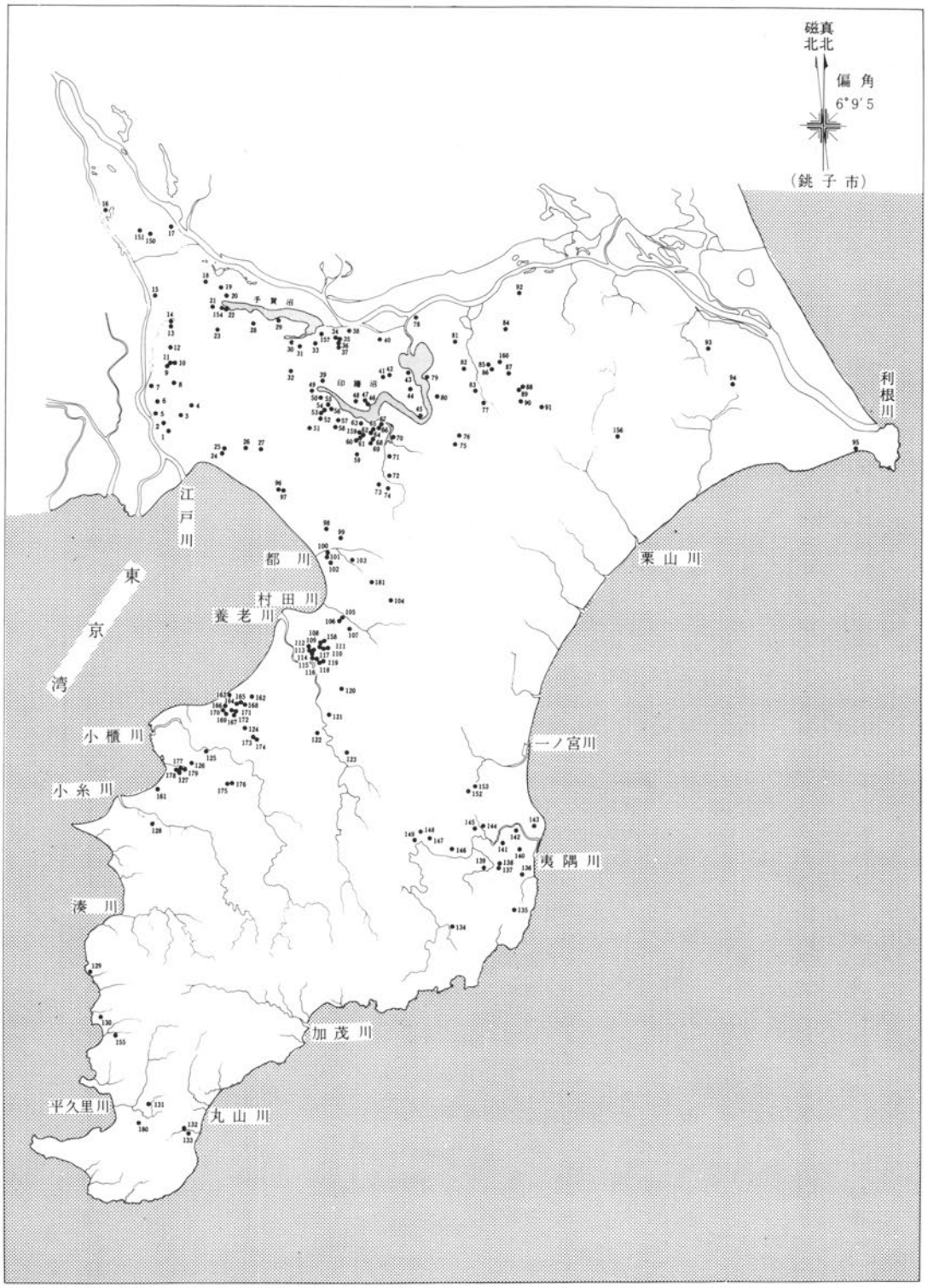
すでに前節で言及されているように、青銅器・鉄器を伴う農耕文化の波が、中期後半に至って房総地方の内陸部に浸透し、さまざまな形で受容されたことが指摘されている。一般的には、関東地方においては中期後半に生じた弥生文化の地方化が一段と発展し、南関東・北関東西部・北関東東部・相模湾北西部の4地域に個性的な小文化圏が成立すると言われ[1]、これら小文化圏が古墳文化に包括されるまでを後期としている。とりわけ、このなかでも南関東は、前葉・中葉・後葉の3期に大まかに分けられ、それぞれ標式遺跡をとって久ヶ原期・弥生町期・前野町期に区分されている。

これまでの房総地方における後期文化は、東京湾沿岸という広範囲な地域を包括した南関東の文化圏の中に位置づけられ、南関東の編年に対比させるような形で推し進められてきた。従って、北関東西部・東部地方との関連性についても、南関東系土器文化圏に対する北関東系土器文化圏という用い方がなされてきた。

本節では、現在までに知見した後期遺跡を集成して各期の遺跡分布状況、文化様相などについて、主要な遺跡をもとに触れ、大まかには久ヶ原期から前野町期に至る文化を受容しながらも、必ずしも北関東系土器文化圏に含まれるとは言い切れない文化圏の存在を指摘するとともに、これらの各時期の文化がどのような形で受容され、統合されて行くかについて言及したい。なおここでは、印旛・手賀沼周辺地域に中心をおく文化圏を設定し、便宜上印旛・手賀沼系式土器文化圏（印旛・手賀沼系期）と呼称していることを明記する。

遺跡分布状態

第23図は、これまでに知見した後期遺跡で、総数181遺跡を数える。この図によれば、下総地方から上総地方にかけて最も多く遺跡が集中し、特に、東京湾に面する地域から印旛・手賀沼周辺地域にかけて顕著に目立つ。これらの地域には、印旛・手賀沼をはじめとして、利根川、江戸川・養老川・小櫃川などの大河川の他に、村田川、都川、鹿島川などの中小河川が位置し、樹枝状に複雑な小支谷を形成して洪積台地と沖積低地を形づくっている。恵まれた水系と好条件の土壌に培われたこれらの地域の後期遺跡は、ほとんどが標高20～25m前後の、沖積面を見下す台地上に占地している。小櫃川付近を境にして、東京湾沿岸地域から太平洋側にかけては調査例も少なく、不明瞭な部分も多いが、内陸部にはほとんど及んでいない。このような分布は、一概には言い切れないが、田子台遺跡のように、あたかも南関東地方の弥生文化が東京湾を渡って伝播されてきたようなありかたを示すことを考えると、下総台地の伝播経路とは別な、海を媒介とする文化の波及が推察されそうである。夷隅川流域では比較的上流域にまで分布しているが、夷隅川以北の太平洋沿岸地域にかけては、ほとんど遺跡例は認められない。調査例が少ないことの他にも、他の地域に比較すると遺跡数は総じて少ないようである。



第23図　房総弥生後期遺跡分布図（1/800,000）

第2表　弥生後期遺跡表

遺跡No	遺跡名	所在地		文献
1	日出学園	市川市菅野2	前	90
2	須和田	〃　須和田2	久、弥、前、印	3、6、7、9 11、12、74
3	宮久保	〃　曽谷3	前、印	90
4	殿台	〃　大野町4	前	90
5	国府台	〃　国府台	弥、印（合口棺）	57
6	小塚山	〃　中国分町2523	弥、前	90
7	三町目	松戸市松戸	久	107
8	諏訪原	〃　和名ヶ谷字諏訪原	久、弥、前、印	124
9	上本郷北台	〃　上本郷	印	107
10	中和倉寒風	〃　中和倉寒風	前	59
11	上本郷長者屋敷	〃　上本郷七畝割	久、弥、印	60
12	二ツ木向台	〃　二ツ木向台	前	107、136
13	大谷口	〃　大谷口	久、印	82
14	中金杉道六神	〃　中金杉	前	107
15	下花輪第2	流山市桐ヶ谷	?	113
16	法蓮坊	野田市岩名字法蓮坊967	印	196
17	三ツ堀	〃　三ツ堀	前（弥?）	45
18	鴻ノ巣	柏市鴻ノ巣西高野、花野井	印	115
19	高野台	〃　高野台	?	109
20	中馬場	〃　中馬場	印	177
21	山田台	〃　山田台	?	109
22	戸張	〃　戸張	弥、印（合口棺）	57
23	宮根	〃　宮根	?	79
24	夏見大塚	船橋市夏見町	久、印	95
25	夏見台	〃　夏見町	久、印	175
26	飯山満	〃　飯山満町2	印	210
27	薬園台	〃　薬園台	?	138
28	幸田原	東葛郡沼南町幸田原	弥	52
29	北作(古墳下)	東葛郡沼南町片山字北作	印	52
30	海老内台	印旛郡白井町平塚	印	69
31	真木ノ内	〃　〃　平塚	印	136
32	清戸	〃　〃　清戸堀込370	印	169
33	羽中	〃　印西町浦部	久、印（合口棺）	52
34	下宿	〃　〃　下宿	印	112、135
35	石神台	〃　〃　大森	印	52
36	古新田	〃　〃　大森	印（十王台）	78
37	大山	〃　〃　古新田	前、印（十王台）	52
38	平台先	〃　〃　竹袋	前	112
39	船尾白幡	〃　〃　船尾	弥、印	170
40	鶴塚(古墳下)	〃　〃　小林	弥、印（合口棺）	110
41	茗作中村	〃　印旛村茗作中村	久	52
42	茗作十字路	〃　〃　茗作十字路	久	52
43	吉高家老地	〃　〃　吉高家老地	印	194
44	仲井	〃　〃　山田	印	52
45	平賀	〃　〃　平賀	印	52
46	戸の内(貝塚)	〃　〃　師戸	印	52
47	桜株	〃　〃　師戸	印	52
48	代官山	〃　〃　師戸	印	52

遺跡No	遺跡名	所在地		文献
49	佐山	八千代市佐山	印	52
50	神野	〃 神野	印	144
51	萱田	〃 萱田	久、弥、印	—
52	村上	〃 村上	印	144
53	名主山	〃 〃 2054－1	印	144
54	大塚	〃 〃 2054－1	印	144
55	おおびた	〃 保品おおびた	印	145
56	先崎	佐倉市先崎	印	159
57	西ノ台	〃 小竹字西ノ台	印	193
58	萱橋	〃 上座字萱橋	印（方形周溝墓）	193
59	畔田	〃 畔田	印	159
60	飯合作	〃 下志津字飯合作	久、印	—
61	石神（第Ⅰ・第Ⅱ）	〃 臼井忍	久、前、印	150
62	渡戸（A・B）	〃 臼井忍	久、弥、前(方形周溝墓)	150
63	八幡台	〃 〃 八幡台	印	193
64	間野台	〃 〃 間野台	久、印	199
65	古屋敷	〃 〃 間野台	久、印	199
66	江原台	〃 〃 田字江原台	久、弥、印	114、198
67	江原台第1	〃 〃 田字江原台	久、印	114、176、197
68	飯重新畑	〃 飯重字新畑	印	125
69	生谷境堀	〃 生谷境堀	印	125
70	佐倉城跡	〃 城内町	印	192
71	大崎台	〃 大崎台字前原1457	弥？(方形周溝墓)	146
72	大篠塚	〃 大篠塚	印	86
73	向井	印旛郡四街道町山梨向井寺台	弥	52
74	中野	〃 〃 中野	？	196
75	藤株	〃 八街町	印（十王台）	52
76	御園	〃 富里村七栄字新橋台上御園	印（十王台）	52
77	烏山	〃 〃 七栄字新橋台上御園	印	163
78	北辺田	〃 栄町北辺田	印（十王台）	52
79	北大台	成田市北須賀	印（十王台）	52
80	公津下方	〃 公津下方	久	52
81	下福田（貝塚）	〃 下福田字ユウガイ	印（十王台）	52
82	八生浅間下	〃 八生浅間下	印（十王台）	52
83	東和田(古墳下)	〃 東和田	印	83
84	土室	〃 土屋	？	137
85	和田	〃 和田関之台	印（十王台）	106
86	浅間台	〃 浅間台	弥、前、印(十王台)	148
87	舟久保	〃 長田	印（十王台）	106
88	和田戸（第Ⅰ）	〃 取香字和田戸	印（十王台）	106
89	取香低地	〃 取香字和田戸	弥？、印	148
90	古込	〃 古込	？	87
91	菱田(古墳群下)	山武郡芝山町菱田	？	148
92	大日山(古墳下)	香取郡下総町字高	印（十王台）	214
93	阿玉台北	〃 小見川町五郷地	久、弥、前、印（十王台合口棺）	164
94	干潟桜井	〃 干潟町桜井寺釜山台915	？	155
95	佐野原	銚子市三崎町	弥？、印（十王台）	139
96	上ノ台	千葉市幕張町2	前	119
97	宮脇	〃 畑町2042	前	102

遺跡No	遺跡名	所在地		文献
98	東寺山石神	千葉市東寺山町	久、弥、前、印	203
99	車坂	〃 貝塚町1521－2	印	99
100	千葉大学構内	〃 亥鼻	久	52
101	弁天台	〃 葛城町弁天台	前	52
102	大久保	〃 千葉寺町大久保	前	52
103	城の腰	〃 大宮町字城の腰	久、印	52
104	椎名谷	〃 誉田町野田字椎名谷	久	52
105	菊間	市原市菊間字北野	久、印？	118
106	手長台（貝塚）	〃 菊間手長2、137	久	210
107	大廐	〃 大廐	久、弥、前	117
108	向原野	〃 郡本字向原野	久	212
109	南向原	〃 郡本字南向原1324－1	久（方形周溝墓）	171
110	坊作	〃 根田540～548	久	212
111	稲荷台	〃 山田橋字稲荷台	？	212
112	台（B地点）	〃 加茂字台	久	179
113	御林跡	〃 〃 字御林跡	久	212
114	加茂（C地点）	〃 〃 字中島510－1	久、弥（方形周溝墓）	180
115	中台（A地点）	〃 惣社字中台	久（方形周溝墓）	212
116	南中台	〃 〃 1064	久	212
117	天神台	〃 〃 1176－2	久、弥	212
118	蛇谷	〃 西広369	久、弥	171
119	西広（貝塚）	〃 〃 字上ノ原	久	171
120	武士	〃 福増字向台34－8	久（方形周溝墓）	183
121	土宇	〃 土宇字堀ノ内	久、弥（方形周溝墓）	—
122	西国吉	〃 南総町西国吉字吉野993－1	？	139
123	南総中	〃 牛久町	久	96
124	山王辺田	君津郡袖ヶ浦町大曽根字山王辺田	久、弥	190
125	菅生	木更津市菅生字睦喜、鶴岡	久、弥	111
126	相里	〃 太田相里218、253	弥	210
127	請西	〃 請西	久、弥、前（方形周溝墓）	121
128	貞元新御堂	君津市貞元字四筋723	久	168
129	明鐘崎	富津市金谷字御代袋	弥	55
130	田子台	安房郡鋸南町山田田子台長村寺台	久	37
131	江田（条里制）	館山市江田字四反町580	？	—
132	健田	安房郡千倉町瀬戸字堀ノ内273	久	149
133	—	〃 〃 〃字堀ノ内	久	—
134	—	勝浦市芳賀	久、印（十王台）	141、151
135	—	夷隅郡大原町小沢根	久	〃
136	—	〃 〃 新田仲川	久	〃
137	—	〃 〃 高谷台	久	〃
138	—	〃 〃 高谷台	久	〃
139	—	〃 〃 高谷殿台	久、弥	〃
140	—	〃 岬町三門1381	久、弥	〃
141	—	〃 〃 鴨根953	久、弥、印（十王台）	〃
142	—	〃 押日2190－2	弥	〃
143	—	〃 〃 和泉清付台	久	〃
144	—	〃 夷隅町松丸北中鎮守台	久、弥、前	〃
145	—	〃 〃 〃 向台	弥	〃
146	引田	〃 〃 引田嶺台	弥、前	〃

遺跡No	遺跡名	所在地		文献
147	—	夷隅郡大多喜町下大多喜寺ノ台	久、弥	141、151
148	—	〃 〃 〃 字台	久、弥	〃
149	—	〃 〃 紺屋打岡台	久	〃
150	二ツ塚	野田市二ツ塚	前	79
151	中根八幡前	〃 中根八幡前	前	〃
152	谷原	長生郡睦沢村村上之郷字谷原	前	〃
153	下町	〃 〃 村下之郷字下町	前	〃
154	城山	柏市戸張町城山	?	〃
155	竹内	安房郡富山町竹内字鈴木畑	久	38、79
156	吉田	八日市場市吉田字城	前	58、79
157	発作	印旛郡木下町発作	久、印（合口棺）	57
158	若宮	市原市山木	久	73
159	円能	佐倉市大字臼井字遠原877	印	156
160	高台	成田市野毛平字高台	弥	137
161	手古塚(古墳下)	木更津市小浜	弥、前？	—
162	八重門田(B2)	君津郡袖ヶ浦町久保田八重門田	久	215
163	大窪	〃 〃 蔵波大久保	?	〃
164	美生	〃 〃 久保田美生	久、弥	〃
165	堂庭山（A2）	〃 〃 久保田堂庭山	久、弥	〃
166	伊丹山	〃 〃 飯富伊丹山	?	〃
167	山崎	〃 〃 蔵波山崎	?	〃
168	堂庭山B	〃 〃 久保田堂庭山	久、弥	〃
169	原	〃 〃 下新田原他	久	〃
170	下野田	〃 〃 蔵波下野田	久	〃
171	山谷	〃 〃 大曽根山谷	久、弥	〃
172	大塚台	〃 〃 大曽根大塚台	弥	〃
173	西原	〃 〃 永地西原	前	〃
174	上泉	〃 〃 上泉十二天	前	〃
175	西岩立作	〃 〃 古野田西岩立作	久	〃
176	沖谷台	〃 〃 大竹沖谷台	久	〃
177	本郷A	木更津市請西本郷	久	216
178	高部台	〃 〃 高部台	久	〃
179	北ノ崎	〃 〃 北ノ崎	久	〃
180	安房国分寺址	館山市国分天沖前	弥	—
181	辺田	千葉市辺田町25－1他	弥	—
		（追補）		
	石神（第Ⅲ）			
	杉ノ木台			
	大和田	館山市沼大和田		
	犬石大道	館山市犬石小字大道1766－1		
	小竹	佐倉市大字小竹1463		

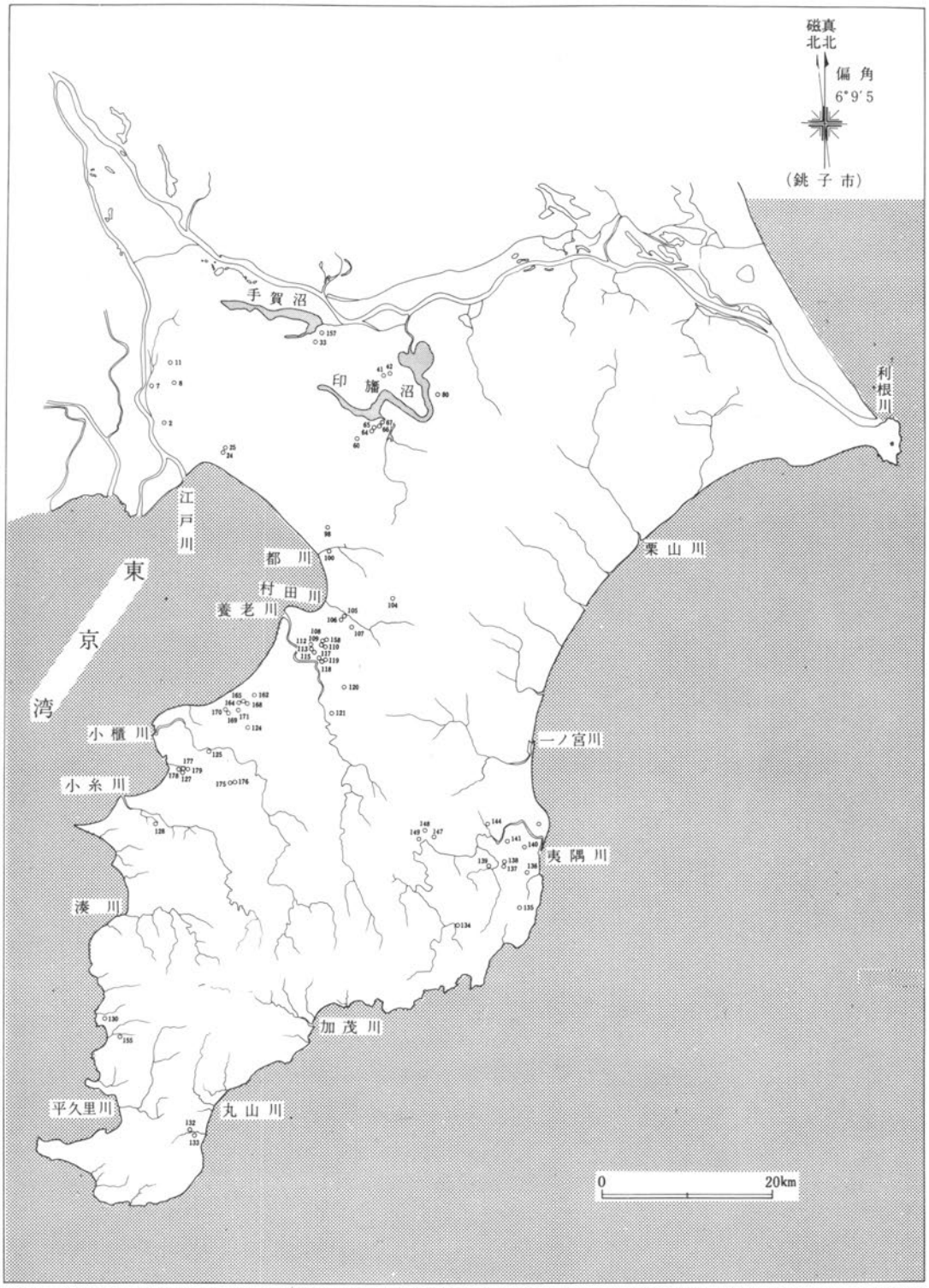
次に、各遺跡を時期別に分類した遺跡分布図をもとに、各期の遺跡分布状況を地域別にとらえて述べる。

久ヶ原期に属する遺跡は67例挙げられる。これらの多くは、下総台地から市原台地の東京湾沿岸地域に集中するが、村田川を境にして、養老川、小櫃川、小糸川などの沿岸地域と、印旛、手賀沼周辺地域とではやや異なった文化様相を持ち、とりわけ土器形態や埋葬形態に顕著に現われる。東京湾東岸にそそぐ江戸川に面した市川市国分台周辺では、須和田遺跡、宮久保遺跡、やや東側の夏見台付近に夏見大塚遺跡、夏見台遺跡などがあり、江戸川を遡った奥部に諏訪原遺跡がある。このうち久ヶ原期から弥生町期を経て前野町期に至るまでの継続した集落が営まれるのは須和田遺跡と諏訪原遺跡だけである。印旛・手賀沼周辺地域では、羽中遺跡、発作遺跡、飯合作遺跡、間野台遺跡、古屋敷遺跡、石神・渡戸（臼井南）遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡などがある。

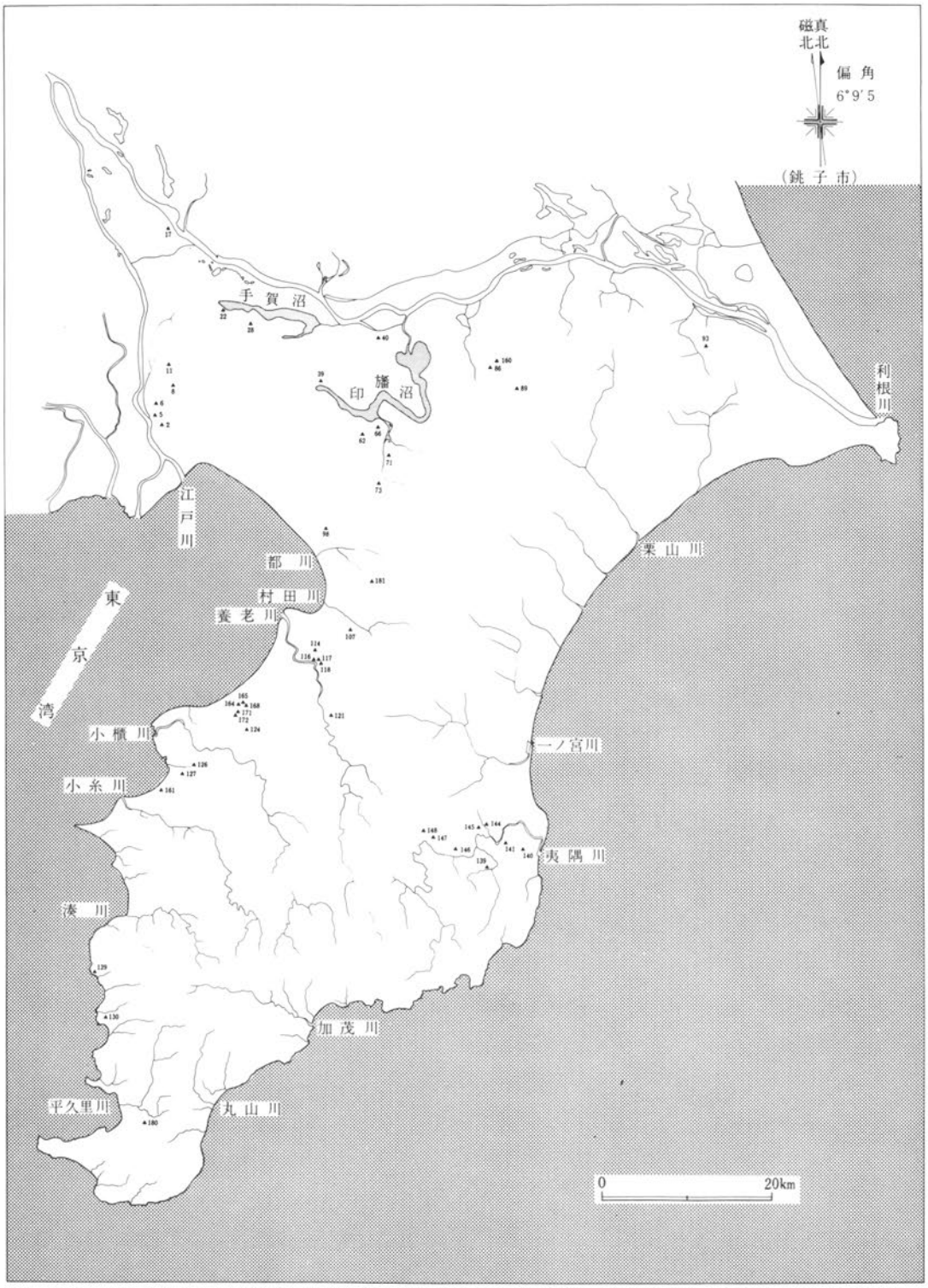
これらの遺跡は、後述する印旛・手賀沼系土器文化圏に包含される地域にあり、言い換えれば、久ヶ原期の文化様相に類似した遺跡と考えられる。とりわけ出土土器に顕著に現れ、久ヶ原式土器は印旛・手賀沼系式土器を出土する竪穴住居址内からは出土するものの量的に非常に少なく、完形もしくはそれに近い形状に復元され得るものはほとんどない。いわば、当地域においては、久ヶ原式土器は主体的な位置を持たず、むしろ客体的な形で反映されると言える。しかしながら、後述するように久ヶ原式土器を伴う文化が、印旛・手賀沼周辺地域を中心とする文化圏に及ぼす影響は大きなものであり、ある意味においてはその発展期の母体を形成していると言っても過言ではない。そしてこれらによって融合されたのが、久ヶ原式土器類似の土器を出土する小判形ないしは胴張り隅丸長方形を呈する住居形態の遺跡群であろう。

村田川以南の市原台地では、印旛・手賀沼系式土器は全く伴わず、むしろ従来の南関東の編年で捉えられる久ヶ原式土器文化圏の中心地域に位置づけられるのではないかと思われる。それは、遺跡数が多いことの他に、文化様相にも顕著に窺われる。厳密には村田川左岸の菊間遺跡でも印旛・手賀沼系式土器に属する土器が出土しているが[2]、中期、後期のいずれにも決めがたいものであり、都川支流域に位置する東寺山石神遺跡でも出土しているが、いずれにしても、この地域が両文化圏の接触地帯であることはまちがいないであろう。

村田川流域では、代表的な遺跡としては中期宮ノ台期に大集落が営まれる菊間遺跡、大厩遺跡が挙げられる。菊間遺跡では、久ヶ原期の竪穴住居址は明瞭には確認されず、宮ノ台期より後出の溝状遺構を確認しただけであるが、大厩遺跡では竪穴住居址12軒が検出されている。村田川流域から養老川に挟まれた上総国分寺台周辺地域にかけては、最近の調査例により、良好な資料を伴う久ヶ原期の遺跡例が増加している。代表的な遺跡としては、南向原遺跡、坊作遺跡、台（B地点）遺跡、中台（A地点）遺跡、南中台遺跡、天神台遺跡、蛇谷遺跡、西広（貝塚）遺跡などがある。南向原遺跡では、南向原古墳群墳丘下から6×5m前後の隅丸方形ないしは隅丸方形を呈する竪穴住居址3軒と、方形周溝墓2基が検出されている。小櫃川流域から



第24図　久ケ原期遺跡分布図（1/800,000）



第25図　弥生町期遺跡分布図（1/800,000）

以南にかけては、菅生遺跡、請西遺跡、田子台遺跡などがあり、夷隅川流域に健田遺跡がある。その他、これらの地域から表採資料ではあるが、2、3久ヶ原式土器が発見されている[3]。

弥生町期に移行すると、分布状況は久ヶ原期と同様な遺跡の広がりを持つが、下総台地ではやや内陸部に浸透してくる。下総台地以外の地域との比較では、両地域とも久ヶ原期に比べて遺跡数が顕著に現われず、集落を構成する住居数も非常に少ないことが言える。久ヶ原期の遺跡説明の中でも述べたが、弥生町期に至っても、印旛・手賀沼周辺地域とそれ以外の地域とでは、やや異なった様相を見せ、やはり先進地域となるのは上総国分寺台周辺地域に求められる。しかしながら、弥生町期がさほど時間を経ずして前野町期に移行すると仮定すれば[4]、印旛・手賀沼周辺地域に見られる弥生町式土器は客体的に共伴しつつも、短期間に主体的な位置を占めていく姿が看取されそうである。

下総台地の東京湾沿岸地域では、須和田遺跡、国府台遺跡、諏訪原遺跡などがある。印旛・手賀沼周辺地域では、戸張遺跡、幸田原遺跡、船尾白幡遺跡、鶴塚（古墳下）遺跡、江原台遺跡、江原台第1遺跡、渡戸（A・B地点）遺跡などがあり、その他やや離れて三ツ堀遺跡、阿玉台北遺跡などが位置する。いずれも印旛・手賀沼系土器を出土する竪穴住居址に少量の弥生町式土器が共伴する例が多く[5]、この地域で弥生町期に属する竪穴住居址で確実なものは、須和田遺跡だけである[6]。国府台遺跡、戸張遺跡、鶴塚（古墳下）遺跡は、すべて合口棺の出土した遺跡である。いずれも蓋に印旛・手賀沼系式土器が、主体部に弥生町式土器が用いられているもので、久ヶ原期に見られたものと全く同一形態を持つものである。市原台地では、大厩遺跡、加茂（C地点）遺跡、天神台遺跡、蛇谷遺跡、土宇遺跡などが養老川流域に位置し、小櫃川流域に菅生遺跡、相里遺跡、請西遺跡、手古塚（古墳下）遺跡などが位置する。このうち集落の数を知見し得たものは、大厩遺跡2軒、加茂（C地点）遺跡2軒、相里遺跡6軒である。相里遺跡からは、土器製作址と思われる竪穴住居址が1軒確認されている。又、加茂（C地点）遺跡からは、方形周溝墓が1基検出されている。これ以外の地域では、遺跡数は少なく、海蝕洞窟遺跡である明鐘崎から壺形土器が出土している他は、安房国分寺址内から墓制に伴う土器が出土しているぐらいである。

前野町期は、一般的に西日本地域より遅れて出発した弥生文化が徐々に生産力を高め、やがて西日本先進地域に追いついて古墳文化を迎えるに至る直前の過渡期に位置づけられ[7]、それまで関東地方の各地域に独立した文化圏を形成していたものが、地域的な伝統を根強く残しながらも汎関東とも言うべき形に包括される時期であるとも言える。しかしながら、弥生時代と古墳時代とを画することが現在に至っても未解決な部分が多い[8]ことを考慮すると、房総地方の前野町期を論ずる上でさまざまな問題がある。このような観点から、ここでは前野町期から古式土師器を出土する遺跡の中で、明瞭に前野町期と述べられているものだけを抽出し、対象となる問題点を提示するだけにとどめたい。

図示した遺跡は30例で、これまでの遺跡分布状況とほとんど変わらないが、東京湾沿岸地域